



「教会学校教師として 召されて」

辰野教会

長谷川 和雄

「わたしの小羊を養いなさい」

ヨハネによる福音書 21・15

多くの方々が右のみ言葉によって、教会学校教師として召され、奉仕に励んでおられるのではないのでしょうか。B・F・バックストン師は、「人を漁^{すな}りたいならば、主に従わなければなりません。小羊を牧会^{すな}したいならば主を愛さなければなりません。愛によって羊を養うことができます」(『ヨハネ伝講義』402頁)とされました。教会学校教師は、キリストにあつて救われ、主の召しに應える者です。福音の真理を正しく、また、わかりやすく伝え、信仰告白のみ言葉に生きる生活へと導く救霊者、教育者、牧会者となることを目指すべきです。

そのためには教会学校教師が、まず信仰の原点に立ち返ることが必要ではないでしょうか。教会学校の目的で大切なことは、救霊と霊育です。その目的を果たすためには、まず教師自身に、**明確な新生の経験**が先決です。自らの罪を認めて、神様のもとに帰り、神様に罪を告白すること。イエス様が十字架の上で死なれたのは私の罪のためであると信じ受け入れ、神様から義と認められ、神様と和解し、新しく生まれ変わることです。このことは最も大切なことです。また、教会学校教師が自己中心のままでは、子どもに良い模範を示し、感化を与えることは出来ません。そして、共に労する教師たちと助け合うことも出来ません。日々主の十字架の血潮を仰ぎつつ、神様のみに心を生かされましよう。教会学校教師はみ言葉による**明確な召命**が必

要です。救霊者として、十字架と復活の福音を正しく理解し、福音に生かされ、子どもたちの救いを祈り求めましよう。

教育者として、祈りとみ言葉のご用に励みましよう。祈りを教えるときは、子どもと一緒にみ言葉に立つて祈り、また、祈りが聞かれる体験をとおして証^{あかし}をし合う喜びの生活に導きましよう。「子ども聖書日課」などを用いてみ言葉を蓄え、祈りを学びましよう。子どもたちが集まりやすい水曜日や土曜日などに「子ども祈り会を開催して、お互いの祈りの課題のために祈り合い、生活の中でいつでも祈れるように導きましよう。

牧会者として、子どもたちを心から愛し、①子どもと向き合い悩みを聞き、罪の生活に勝利するように導きましよう。②神様のみに心にする生活の仕方、神のみこころを確かめる方法」(『ジョージ・ミューラーの祈りの秘訣』)などを学んで、自らも実践し、子どもの将来の導きに生かしましよう(ローマ12:1-2)。③友だちを誘い伝道する喜びを教えましよう。アンデル賞などで子どもを励ましたり、「字のない本」などの活用方法を教えるのもよいでしょう。④主の奉仕は、教会のお掃除や子ども集会の案内作りなど、小さな奉仕から共に始め、その喜びを分かち合いましよう(エペソ2:10)。⑤互いに愛し合い受け入れ合つて、神の栄光を現す者へと導きましよう(ローマ15:7)。

色々な方策に頼るのでなく、信仰の原点に立ち返り、「**万事聖霊・万事祈禱**」により、何よりも主の業に励みましよう(出エジプト14:14、歴代下20:15-17)。

牧羊者

目次

巻頭言	1
教師養成講座 旧約聖書丸ごと早わかり(4)	3
福音に生きる	9
聖霊に満たされて	24
証人として生きる	36
カリキュラム解説	48
牧羊ひろば(岡南教会)	49
おわりに	50

教師養成講座

旧約聖書丸ごと早わかり(4)

鎌野 直人

はじめに

今回は、旧約聖書の詩歌と呼ばれる五書の概略を学んでいきましょう。

これらの五書は一般に「詩歌」としてひとまとめにされますが、本来の意味での「詩と歌」が綴られているのは詩篇および雅歌のみです。箴言、ヨブ記、伝道の書は「知恵文学」と呼ばれ、神が主権者として支配しておられる世界で、いかに生きるべきかを教え、考えさせる書です。一方で、箴言、雅歌、伝道の書の三つは、イスラエルの王ソロモンとの深いかわりを持つ書としてまとめられることもあります。

I ヨブ記

1 内容

ウツという誰^{だれ}も知らない遠くの地に、はるか昔住んでいたヨブの上に起こった出来事と、その後のヨブ、その友人たち、そして神の激論が本書に記されています。「苦しみには理由があるのか」という重いテーマを取り扱いつつ、「主は一体どのような方であるのか」について考えさせる書です。

2 分解

① プロローグ（1〜2章）

「全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかった」（1:1）歩みをしていたヨブは、十人の子どもと数多くの財産を所有していました。子どもに對しては過保護なヨブでしたが（1:5）、神の前に完璧^{かんぺき}と思えるような歩みをしていました。

義人ヨブを巡って、天にある神の議會で議論が起りました。「訴える者（ヘブル語で『サタン』）」は「ヨブはいたずらに神をおそれるのではなく、何かの報いを求めて主に従っているのだ」と主に訴えました。そこで、主はヨブのすべての所有物を奪う許可を訴える者に与え、その結果、ヨブに属する家畜、しもべ、子どもたちすべては奪われ、しまいます。

そのような状況にあっても、主をのろわず、罪を犯すことをしなかったヨブを見た時、訴える者はさらにその要求をエスカレートします。彼は、「ヨブ自身の肉体を撃つてみよ」と主に申し出ました。そこで、ヨブのいのちを奪わないとの条件付きで、主は訴える者にヨブの肉体を撃つことを許され、その結果、ヨブは病に倒れました。理由なくヨブが撃たれたのを見た彼の妻は、「神をのろって死に

② ヨブと友人との対話（3〜27章）

三人の友人（エリパズ、ビルダデ、ゾパル）が苦難にあったヨブを慰めようとやってきました。しかし、ヨブの最初の言葉（3章）に對する彼らの議論は、もはや慰めではなく、訴追となっていました。4章から28章にかけて、ゾパル以外の友人が三回ずつ、そしてゾパルだけが二回、ヨブに語り、それぞれに對してヨブが反論しています。

ヨブは、その最初の訴え（3章）で自らが誕生した日をのろつています。「その日が暗くなるように」と訴えることにより、すべてが暗闇に包まれることのみならず、神が造られた世界の秩序が完全に崩れてしまうことを彼は願いました。また、今生かされていることを彼は嘆き、死を望みました。神がそのいのちをあえて保ったこと（2:6）をヨブは知らなかったのです。ヨブはなぜそこまで嘆いたのでしょうか。「自分自身のような正しい者が苦しむと言うことは、この世界にはもはや秩序は存在しない」と理解したからです。つまり、神が造られた世界には倫理的な秩序は存在しないとヨブは考えたのです。

ヨブの嘆きに對して、友人たちは「神は正しい者に祝福を与えられる、罪を犯した者に災いを与えられる」と確信していました。ですから、ヨブの苦難を見て、「ヨブは隣人に對して罪を犯したか

ら、このような苦しみにあっているにちがいない」と断定しました。けれども、ヨブは自分が何の罪も犯していないことを知っていましたから、当然自らの潔白を主張し続けました。

ヨブと友人たちの議論を注意深くたどつていくと、友人たちはただヨブに向かって議論をふっかけていますが、ヨブは友人たちに反論するだけではなく、神に向かって祈っていることに気が付くでしょう。徹底的に自分を痛めつけている神に対して、この苦しみを取り去るようにとヨブは嘆きました（たとえば7・11～21）理由なき苦難を経験したゆえでしょうか、ヨブはもはや神を恐れてはいません。大胆に、そして率直に自らの主張を神に向かって投げ続けました。それでは、神に対してヨブは何を訴えたのでしょうか。神は勝手気ままに自らの思いを実現しておられる、神はこの世界を秩序ある世界としては保っておられない（21・7～34など）、だからそのような神と何とか話をしたい（13・22）、そして「わたしをあがなう者」（19・25）と呼ばれる仲保者がほしい、という点がヨブの訴えの中心でした。

残念ながらヨブとその友との対話は全くかみ合っていない。それは、誰一人として1～2章に描かれている神の議会での問答を知らないからです。「ヨブは理由なく苦難にあっている、ヨブは神のあわれみのゆえに命を保たれている」ことを彼らが知っていたなら、その議論はここに書かれているものとは違っていたでしょう。

③ ヨブの最後のアピール（28～31章）

ヨブの最後の訴えの直前に、知恵に関する詩が挿入されています（28章）。知恵を見いだすことは、貴金属を採掘することと同様に困難です。しかし、「神はこれに至る道を悟っておられる、彼はそのある所を知っておられ」（28・23）る、だから神に求め続けるべきだ、とヨブは考えました。事実、彼は苦しみの中から神に訴え、神から知恵をいただくことができました。しかし、「主を恐れ、悪から離れて歩んでいた」と言われていたヨブもまだ知恵を自分のものとはしていませんでした（28・28参照）。本書の最後でつむじ風の中から応えられる主に出会ってはじめて、彼は本当の知恵を獲得するのです。

この詩に続いて、ヨブは神に対する最後の訴えを述べ、彼の議論は終わりました（29～31章）。

④ 神のために語るエリフ（32～37章）

ヨブと三人の友人たちの議論が終わった後、エリフは「神のために」（36・2）語りはじめます。彼は、世界の王である神ご自身が世界のさまざまな働きに直接関わっておられる、しかし、神は悪を行わず、偏り見ることもないが、「われわれの悟りえない大いなることを行われ」（37・5）る方である、と述べました。彼のことは、続く神の答えに対する準備と考えることができます。

⑤ 神のヨブに対する答え（38・1～42・6）

神がつむじ風の中から現れ、ヨブに直接答えられます。しかし、主はヨブの疑問に対する回答を

与えられた訳ではありません。神が造られた世界の姿を述べることによって、ヨブの無知と人の考えを超えた神のみわざを示しています。

神はあらゆるものに何らかの境界線を定められる方です。しかし、すべてをがんじがらめに縛るのではなく、境界線の内側にある限り、ある程度の自由を神は与えられています（38・10）。また、人から見たら無駄とも思えるような行動をも神は起こされます。そして、愚かに思えるような存在をも喜び、自慢されます。「人なき地にも、人なき荒野にも雨を降らせ、荒れすたれた地をあき足らせ、これに若草を生えさせる」（38・26～27）神の姿は、効率を考える人間の対極に位置するでしょう。ヨブはこのような神の姿を知りませんでした。

「神をおそれ、正しく歩んでいた自分は神の創造物の頂点にある」とヨブは考えていました。だから自分の苦しみの理由を神に求めたのです。しかし、ヨブは間違っていました。神から見ると、ば、被造物の間に優劣はありません。人から見ると愚かに思えるような存在さえも神は自慢しておられるからです。この人間の価値観を越える神の姿にヨブは気付き、今までの考えを捨てると告白しました（42・6）。

⑥ エピローグ（42・7～17）

あらゆる面において正しかったわけではありませんが、神に向かって祈り続けたその姿勢のゆえに、「ヨブは神について正しいことを語った」と認められました。そして、主はヨブの繁栄をもとに

返し、すべての財産を二倍にされました。

ヨブはこの苦難を通して知恵を獲得し、本当の意味で「神をおそれる」ようになりました。いつ失うかも知れない財産を、主からもう一度受けたからです。危険を承知の上で、喜んで受け、それを今度は喜んで他者に与える存在にヨブは変わりました。そして、神がその被造物を誇ったように、自分の子どもたちを喜ぶ者にヨブはなりました。1章に描かれていた過保護のヨブの姿はもうありません。「神のように歩む」、つまり「自由と喜びをもって生きる」という意味で神をおそれる知恵をヨブは獲得したと言えるでしょう。

Ⅱ 詩篇

1 序論

詩篇は150篇の詩からできています。ここに収められている詩の多くは、エルサレムの神殿での礼拝において読まれ、祈られたものです。一方で、詩篇ほど変化に富んだ書は他にはありません。詩の長さの違い（最長の119篇は176節、最短の117篇は2節）にとどまらず、その内容の幅の広さは驚くばかりです。ここでは詩篇全体の持つメッセージを概略し、それに続いて比較的頻繁に出てくるいくつかの詩のジャンルについて述べることにします。

2 詩篇全体のメッセージ

詩篇全体は五つの巻に分けられています。第一巻は1～41篇、第二巻は42～72篇、第三巻は73～89篇、第四巻は90～106篇、第五巻は107～150篇です。これは律法（五書）に倣っていると言われています。それぞれの巻は「主はほむべきかな」と、主への賛美をもって終わっています。更に詩篇全体も「主をほめたたえよ」（ヘブル語で「ハレルヤ」）が繰り返される詩篇で終わっています（146～150篇）。このように、詩篇は主をほめたたえる賛美の書です。けれども、詩篇には賛美の歌以外にも様々な歌が含まれています。たとえば、主への嘆きの祈りや、主への感謝の歌や、律法についての歌です。ですから、詩篇を単なる「賛美」の書と考えることもできません。それでは、どのようなメッセージが150の詩に流れているのでしょうか。

詩篇のテーマの一つは、主が立てられた王が危機に瀕していることです。このことは、イスラエルを代表する王であるダビデの歌を通して描かれています（2、3篇など）。敵が立ちあがる中、王は主に祈り、主に信頼し、主の救いを待ち望んでいます。しかし、現実には願っていたようにはなりません。第三巻の最後を見ると、主は「油注がれた者を捨ててしりぞけ、彼に対して激しく怒られました」（89・38）とあります。都は荒れ果て、王位は奪い取られ、もはや希望もないような状態にイスラエルは陥っています。

それではイスラエルとその王への救いはどこから来るのでしょうか。「この世界のまことの王は人ではない、神である」という信仰こそ、救いの源

泉であり、詩篇の告白する信仰の中心です。まことの王である主が、公正と正義によって正しい支配をなされる時（95・3）、「世界は堅く立つて動かされることはない」（96・10）現実が世界に満ちます。そして、主こそがまことの王なのですから、「主のおきてを喜び、昼も夜もおきてを思う」（1・2）生き方を選択するように主の民は招かれています。このように、王である主に律法を通して従うことこそ救いの道である点が、本書の二つ目のテーマです。

それでは、民の救いは具体的にはどのようなようにたらされるのでしょうか。それはダビデの子、救い主（メシヤ）を主がもう一度立てられることによつてです（132・17～18）。この救いを目の当たりにした時、民は主をほめたたえます。このように、ダビデの子による救いの到来こそ詩篇の三つ目のテーマです。

3 様々な詩のジャンル

詩篇に含まれている歌はいくつかのジャンルに分類することができます。そこで、主要ないくつかのジャンルについて考えてみましょう。

① 賛美の歌

詩篇には多くの「賛美の歌」が含まれています。ここでは主のすばらしいみわざ、たとえばイスラエルを創造されたこと（100篇）、世界を創造されたこと（104篇）、歴史を導かれること（33篇、103篇）がほめたたえられています。

賛美の歌には三つの特徴があります。まず、周りの人々への呼びかけから始まります。たとえば、「もろもろの国よ」「もろもろの民よ」(117・1)と、周りにいる人々が共に主を賛美するように詩人は呼びかけます。次に、主への賛美そのものである命令、「主をほめたたえよ(ヘブル語で『ハレルヤ』」(117・1)の言葉が続きます。三つ目に、賛美の歌には主を賛美する理由が書かれています。たとえば、「われらに賜るそのいづくしみは大きい、主のまことはとこしえに絶えることがない」(117・2)という主の姿に対する感謝が賛美の理由です。

② 律法の歌

律法に関する歌の中で最も有名なのは119篇です。ただし「律法の歌」と言っても、旧約聖書の律法の内容を教える歌ではありません。「主のおきて」の素晴らしさを訴える歌のことをこのように呼んでいます。更に、良い人生、喜びある人生を歩むための秘訣が律法の歌には語られています(1篇、19篇)。また、37篇では悪しき者が栄えている現実にとどのように向き合うべきなのが教えられています。このように、賛美と祈りを集めた歌集としてではなく、「人生の取り扱い説明書」として詩篇を読む必要もあります。

③ 祈りの歌

敵に囲まれたり、病の中にあったり、捕囚の中にあったり、と困難な中にいる詩人が主に向かって叫んだ祈りが詩篇には多く含まれています(たとえば13篇、31篇、42・43篇など)。そして、神な

しでは生きていくことができない、弱く貧しい者の主への信頼に立つ叫びが、そこには綴られています。なお、祈りには個人の祈り(「わたし」の祈り)と共同体の祈り(「わたしたち」の祈り)があります。

祈りの歌にはいくつかの特徴があります。まず、詩人は祈りの対象である主に向かって声をあげます(142・1・2)。次に、自らの陥っている状況を主の前に告白しています(142・3・4)。主が働いておられない、と考えるような現実ですが、詩人は「あなたはわが避け所」(142・5)と主への信頼を告白します。そして、困難な状況から彼を救い出してくださるように主へ乞い願います(142・6・7)。最後に、主が祈りに答えてくださった時、感謝をさげざることを約束しています(142・7)。なお、祈りの中で「なぜ聞いてくださらないのですか」と詩人は叫んでいます、彼の主への信頼は変わりません。深い信頼に基づいて、大胆に主に向かって叫んでいるのです。

④ 感謝の歌

困難の中で主に祈った祈りが聞かれ、そこから救い出された時、主への感謝がさげられます。詩篇の中には主から救い出されたことへの感謝を歌った詩があります(たとえば32篇、107篇など)。感謝の歌は祈りの歌と構成が似ています。主への叫び、困難の告白、主への信頼の告白、誓いの言葉という祈りの歌の要素が、多くの感謝の歌には含まれています。しかし、感謝の歌には、主が

祈りに答えてくださったことが「証し」として叙述され(30・1・3、11)、感謝と賛美のことばが加えられています(30・4・5、11・12)。

感謝の歌には信仰者の歩みが映されています。感謝の歌も信仰者の生涯も、主への嘆きの祈り、祈りに応えられる主の恵みのみわざ、そして主への感謝の繰り返しからできているからです。なお、22篇を祈りの歌に分類することがありますが、22節以降は主への感謝と証の言葉です。ですから、これは主への感謝の祈りに分類すべきでしょう。

III 箴言

1 内容

本書は「ダビデの子、イスラエルの王ソロモンの箴言」(1・1)と記されていることからわかるように、知恵を求め、知恵を説いたソロモン王(列王上3・4章)と深いかわりがあります。しかし、すべてがソロモンによって書かれたのではなく、イスラエルの長い歴史の中で語られ、集められ、また他国から輸入された知恵のことばから本書は構成されていると考えるべきでしょう。

2 分解

① 箴言の目的(1・1・7)

知恵を自分のものとするために、人は箴言を学びます。しかし、知恵は知的なものに留ま^{とど}まってはいません。むしろそれは全人格的な美徳です。人

格が整えられることによって、人生を上手に操縦する方法を学び取っていくからです。

誰が知恵を学ぶべきでしょうか。「思慮のない者」、まだ知恵を習得していない人は箴言を学ぶべきです。しかし、「知者」と呼ばれるほど知恵を蓄えた人でも「学に進む」必要があります。つまり、どのような人も一生知恵を学び続けるべきであると箴言は訴えています。

知恵を学ぶための最も基本的な姿勢は何でしょうか。それは「主をおそれること」です(1・7)。神に恐怖心を抱いて生きることではありません。主なる神こそこの世界のすべてを支配しておられる方であると認めることです。ですから、単なる「世の中を上手く過ぐす方法」ではなく「神が生きて働いておられる世界でどのように生きるか」を箴言から学ぶことができます。

② 知恵を学ぶ方法(1・8～9・18)

両親が息子に向かって知恵をどのように学べばいいのかを語りはじめます。両親が語り伝える知恵のことばに耳を傾け、それによって自らを飾るならば、知恵を会得できると親は語っています(1・8～9)。しかし、知恵を獲得することを邪魔する者たちが息子の周りには多くいます。悪い友人たち(1・10～19)や不倫へと誘う女性(5章など)です。しかし、このような人々の誘いの声に打ち勝ち、むしろ主の天地創造のわざに関わった知恵の声に息子は従うべきだ(8章など)と、説得のことが続きます。

③ 格言集(10・1～30・9)

箴言の中心に当たるこの部分には様々な格言が集められています。ここでは、家族と友情、ことば、主を恐れる歩み、社会における公正と正義、国家と王、富と貧困など、人生を歩む上で必要な多種多様な事柄が取り扱われています。

④ 有能な妻(31・10～31)

箴言は「有能な妻」(31・10〔新共同訳〕)の姿をもつて閉じられています。これを両親から知恵の教えを受けた息子がめとった理想の妻の姿と考えることができます。彼女の働きは多岐にわたります。家庭に必要なあらゆるもの(衣料、食料、農事)の準備、その管理、町の門で裁きを司る長老となった夫への援助(31・23)などがあげられています。これほどの働きをすることができるのは、彼女が「主を恐れる」ことによって生きているからです(31・30)。両親の伝える知恵を学び続ける者に、主が約束された豊かな祝福の一端を有能な妻は表しています。

IV 伝道の書

1 内容

「空の空」(1・2)で始まり、終わる伝道の書(「伝道者の書」「コヘレトの言葉」)は、神の絶対主権の下にある無力な人間が、不確かなこの世界で、どのように生きるべきかを物語っています。

箴言同様に、ソロモン王との結びつきがあると言われています。しかし、彼の名は記載されておらず、ただ「ダビデの子、エルサレムの王である伝道者」(1・1)と自らを呼んでいるに過ぎません。なお、「伝道者」と訳されている語はヘブル語で「コヘレト」と言い、集会で人々に語り聞かせる人を指しています。

2 分解

① 王の探求と失敗(1～3章)

王であり、知者であり、富を蓄えた伝道者は、いつまでも残る益を探求しました。しかし、彼の努力はむなしく終わり、王であることも、知恵あることも、蓄えた富さえも、いつまでも残る益を彼に残してはくれません。それはすべての人が死ぬべき運命にあり、死があらゆる益を人から奪い取るからです。ただ、神が与えてくれる喜びのひと時だけが、伝道者の心を和ませるものでした。

② 富の限界(4・1～6・9)

富に関して伝道者は観察し、考察を加えます。富を獲得するために孤独になつてしまふ現実、満足することのない人の欲望、蓄えた富さえも自分のために用いられない悲劇を目の当たりにした時、富は決して人にいつまでも残る益を残さないことが明らかになります。その一方で、神殿で礼拝するにあたって、全権者である主を恐れる生き方を送るようにと勧められています。

③ 知恵の限界（6・10～9・10）

知恵あることは、愚かであることよりも、確かに勝れてはいます。しかし、神が治めておられるこの世界の現実を鑑みる時、知恵さえもその輝きを失っていることに気がつきます。なぜならば、どれだけ知恵があったとしても、人は将来起こること、特にみずからの死を完全に予測することができないからです。そのような人生であるからこそ、今、与えられた時を生かし、主が与えてくださった喜びのひと時を最大限に活用すべきです。

④ 知恵ある歩み（9・11～12・8）

富にも知恵にも限界のあるこの世界で、生きるためにはどうすればいいのでしょうか。時を完璧にとらえることができない現実を受け入れた上で、気前よく隣人に与え、機会を逃さずに歩むことを伝道者は勧めています。この世界を治めておられる創造者である神を心に留め、その方を計算に入れて、生かされているこの時を存分に生きるならば、限界の多いこの世界でも、幸せに過ごすことができます。

⑤ エピローグ（12・9～14）

本書のほとんどの部分は、伝道者一人の語りで占められていました。しかし、エピローグはそうではありません。記者は伝道者が知者であったことを記した後、主を恐れ、主の律法に従うことこそが、人の本分であることを読者に命じて、本書の幕を閉じています。

V 雅歌

1 内容

雅歌は羊飼いの村に住む男女の愛の歌です。このような歌が聖書に含まれているのは、男女間の情熱的な愛を神は軽視しておられず、むしろ、それを素晴らしものと認めておられるからです。その一方で、ユダヤ人は雅歌にイスラエルへの神の愛が歌われていると、クリスチャンは教会に対するキリストの愛が記されていると理解してきました。様々な解釈がありますが、ここでは男女間の愛の歌ととらえて、概要を考えてみましょう。

2 分解

翻訳ではわかりにくいのですが、本書はおとめ、女たち、花婿、男たちが交互に呼びかけ合う構成をとっています。

第一部（1・2～2・7）では、そばにいない愛する人を慕う女性の歌に続いて、花婿、さらにはおとめがお互いの美しさをパロの車の雌馬、よい香りのする花、リンゴの木にたとえて歌っています。第二部（2・8～3・5）では、まず、花婿から誘いのことばをかけられたことをおとめが述べています。それは、冬が去り、春がやって来たからです。この誘いに彼女は応え、夜、花婿を探し求めます。当初、彼は見つかりませんでした。しかし、最後には彼女は彼を見いだします。

豪勢な乗り物に乗って花婿が結婚の宴に到着する様子から、第三部（3・6～5・1）は始まります。彼はおとめの「美しく、少しのきずもない」（4・7）姿をほめたたえ、彼と共に歩むようにおとめを招きます。そして、彼女の愛と彼女のおりの素晴らしさをほめたたえます。ところが、おとめは応えることができません。第四部（5・2～6・3）の冒頭で、花婿が彼女の家の戸をたたく音でおとめは目を覚まします。あわてて起きて、戸を開けた時、没薬の香りだけを残して、彼は去ってしまいました。彼女は彼への愛に病んでいることに気づき、花婿の麗しさを様々な宝石にたとえて語ります。そして、自分は野で群を飼っている彼のものだ、と告白するのです。

おとめの声に応え、第五部（6・4～8・4）では、王妃やそのそばめたちよりも、おとめのほうが美しいと花婿はほめたたえます。彼女も彼と共にいることを夢見ます。そして、シオンの女たちはおとめの姿の美しさを歌い、花婿もおとめの口づけを思い、彼女への思いを叙述します。おとめもどう園に行き、彼と共にそこにいて、彼に抱かれることを願うのです。そして、第六部（8・5～14）において、愛の力をほめたたえ、愛する者がすぐさま自分の所に来ることを願いつつ、雅歌はその幕を閉じます。

参考文献

Lasor, Old Testament Survey, 2nd ed.

聖書 ヨハネ12・12～25 テーマ 一粒の麦

序論

(鎌野)

新しい年度は、「信仰に生きる」を年題としている。まず六月までの第一期は、「十字架信仰」に焦点をあて、この信仰がキリスト教信仰の出発点であることを学ぶ。今週は受難週、来主日はイースターであることから、今後2週間のテキストが選ばれていることに留意したい。「しゅろの主日」である今日は、ヨハネ福音書から、ちょうどこの日に起こった出来事の意義を探ろう。ヨハネはこの個所で、しゅろの枝、ろばの子、一粒の麦という三種の具体的な事物によって、主イエスがどういうお方かを象徴的に示そうとしている。

一、しゅろの枝の意義

他の福音書が「木の枝」と記すところを、ヨハネだけは「しゅろの枝」と明言する。しゅろは旧約聖書では「なつめやし」と訳される常緑樹で、繁栄の象徴とされていた(詩92・12)。ヨハネは、黙示録7・9で、しゅろの枝をもった群衆が神を賛美している姿を描いている。今日の個所でも群衆(多分、ガリラヤから過越祭に来ていた巡礼者たち)は、詩篇118・25、26を引用し、「ホサナ、主の御名によってきたる者に祝福あれ」と叫んでいる(ホサナは「お救いください」という意味のヘブル語)。だが、「イスラエルの王に」という句は詩篇にはない。群衆は、主イエスが王として首都エルサレムに入城されたのだと考えたのである。

主のガリラヤでの活躍を知っていた人々や、ラザロの復活を見聞していた人々は(17、18節)、主が政治的な王となり、奇跡的な力をふるってローマの支配から民を解放なさることを期待していた。しかし、それはその後の言動からわかるように、主の思いではなかった。かえって主は、それと正反対のことを考えておられたのだ。

二、ろばの子の意義

戦争に勝利した王は普通、馬に乗って凱旋するのだが、主は、ろばの子を見つけて、その上に乗られた。ろばは、馬よりもはるかに小さく、力もない。ろばの子ならなおさらだ。ゼカリヤは救い主の使命を知った上で、「見よ、あなたの王がろばの子に乗っておいになる」と預言したのである(9・9)。それゆえゼカリヤは、その次の節で、「わたしは…エルサレムから軍馬を断つ。…彼は国々の民に平和を告げ…」と記している。

この時、主を政治的な王と考えていたのは、群衆だけではなく、弟子たちも同じだった。しかし、イエスが栄光を受けられた時に(つまり、十字架、復活、昇天の後に)、ゼカリヤの預言がイエスについて書かれていたことに気が付いたのである。主イエスの使命が、政治的な解放ではなく、罪からの解放であったことは、さらに、その後の主の姿を見ればよく理解できる。

三、一粒の麦の意義

主イエスに敵対していたパリサイ人が「世をあがて彼のあとを追って行つた」とため息をつくほ

ど、主の人氣は高まっていた。さらに、巡礼に来ていたギリシヤ人(多分、割礼は受けていないが、唯一の神を信じていた人々)も「イエスにお目にかかりたい」と訪ねてきたのである。主が覚悟されていた(時)が来た(2・4、7・6参照)。十字架において、ユダヤ人だけでなく、ギリシヤ人をはじめ全人類の罪の身代わりになるという、神の時が来た。それは、主が一粒の麦になることによって、初めて実現することにはかならない。

神である主イエス(一粒の麦)は、人となってこの地上に來られた(地に落ちた)。さらに十字架で死なれるとき、豊かに実を結ぶ(全人類の救いとなる)。これは、二千年前、文字通りに実現した。しかし、この真理は、単に主イエスの場合だけではない。主に従う者たちも「自分の命を愛する者はそれを失うが、この世で自分の命を憎む者は、それを保って永遠の命に至る」のである。

一粒の麦が死ぬとは、自分の形を失うことを意味する。しかし、形は失われても、その命は次の世代に受け継がれている。私たちも利己的な自分の生き方を捨て、犠牲的に生きるときこそ、永遠の命を得ることができるのだ。

結論

しゅろの枝になって、主を賛美することは素晴らしいことだ。ろばの子のように主のご用に用いられることも幸いである。しかし、本当に大切なのは、一粒の麦になって死ぬことである。たとい損になることでも、喜んでそれを受け入れようではないか。それこそが主の弟子の使命である。

研究資料

(足立)

イエスのエルサレム入城の記事はすべての福音書に共通して描かれている(マタイ21:1〜11、マルコ11:1〜10、ルカ19:28〜40)。特にマタイとヨハネはゼカリヤ書の預言を用いて、イエスの行為の深い意味を伝達している。

テキスト

12 ヨハネは入城の出来事と群衆の行為を二つの視点で記している。一つは、過越すゐぎの祭りのためにエルサレムにきた巡礼者は **大勢** であったということ。もう一つは、イエスがラザロを死人の中から生き返らせたとき、そこにいた人たちが同行していたという点である(17)。

13 群衆はイエスに詩篇18:25〜26の言葉を当てはめ、来るべきイスラエルの王として、イエスにメシヤの称号を適用している。6:15でイエスを王としようとした群衆と同様に、政治的なメシヤを期待する民衆の姿が感じられる。

14 エルサレム入城は、イエスの時が来たことの声明でもあった。彼は征服者としてではなく、平和の使者として来た。彼は軍馬ではなく、ろばに乗った。それはゼカリヤ9:9の預言の成就。

15 **シオンの娘** とは、エルサレムの町を擬人化する表現(イザヤ1:8、エレミヤ4:31、哀歌2:4、ミカ4:8、ゼパニヤ3:14)。

16 弟子たちはこの時点でイエスの置かれている状況を理解していなかったが、後に分かる様になった。同様な挿入句的な表現が2:17、22にもある。著者ヨハネは相変わらず弟子たち(自らも含めて)が

鈍く、いかに無理解な状態であったかを告げているように思える。彼らはイエスとの旅の途上においては、霊的な認識を持つに至ってはいなかった。受難と復活がイエスの人格の謎を解く鍵であった。

17 18 ここで第二の群衆への言及がなされている。イエスについてきた一団が、イエスがベタニヤでラザロを生き返らせたことを証言した。これらの人々がイエスの奇跡を公にし、エルサレムの多くの物好きを呼び起こした。逆にこのことでエルサレムへ向かう道はイエスを見ようとする群衆で膨れあがった。

19 エルサレム近辺でイエスへの熱狂的な支持が広がったことで、パリサイ人たちは自分たちが彼にして来た事に何ら効果がないことに気づいた。

20 **数人のギリシヤ人** 彼らは、生まれは異邦人だが、すでにユダヤ教に改宗していたのだろう。過越の祭りに巡礼に上つて来たのだから、無意味な偶像礼拝より、より良いものをユダヤ教のうちに見出していたのだろう。

21 ギリシヤ人たちは間接的な方法でイエスに近づいた。たぶんユダヤ教の偉大な教師に話しかけるのに気後れし、友人を介して近づこうとしたと推察される。彼らがピリポに頼んだ正確な理由は分からない。ピリポの名前はギリシヤ語であり、「馬を愛するもの」という意味。このことから彼らはピリポと接触を持ったのかもしれない。

22 ピリポは彼らが求めるものが何であるかはわからなかった。彼はこの場に際してアンデレを見つけた。ピリポとアンデレは一緒に言及されることがよくある(参照ヨハネ1:44、6:7以下、マルコ3:18)。期待通りアンデレはピリポと一緒にイエスに語りかけた。

18)。期待通りアンデレはピリポと一緒にイエスに語りかけた。

23 イエスの答えは予期しないものであった。**人の子が栄光を受ける時がきた** イエスの時は、彼の思いの基調を示すもの。生涯の上にある神の御旨を決定的にする時を意識しつつ、歩んで来られた(ヨハネ2:4、7:6、8:30、8:20)。しかし十字架が即座に差し迫ったこの時、イエスは明確に発言した(ヨハネ12:27、13:1、16:32、17:1参照)。イエスは間違はなく自分の死に言及している。しかも悲劇としてではなく、勝利として。十字架の道を通つての栄光である。

24 **よくよくあなたがたに言っておく** 重要な主張を導いている。一粒の麦は私たちに逆説を導入する。すなわち、豊かな実を結ぶ道は、死を通ることにある。麦が土地に落ちて死なないならば、実を結ぶことはない。豊かに実を結ぶために潜在的可能性がある現実となるのは、ただ死を通ることだけ。これは一般的な真理であるが、主は特別ご自分に言及されている。

25 イエスは弟子たちの働きが実を結ぶことを願っておられる。そのためになくてはならぬ条件として、ご自身の死によって示されたこの根本的な真理を、彼らの胸に刻み付けられた(参照マタイ10:39、マルコ8:36、ルカ14:26)。

参考図書 山下正雄『ヨハネの福音書』『実用聖書注解』(いのちのことば社)、テニイ・M・C、『ヨハネによる福音書』聖書図書刊行会、Morris, L., The Gospel According To John (Eerdmans)

1日 礼拝メッセージ例

聖書

ヨハネ12・12～25

タイトル

一粒の麦（進級・パーム）

暗唱聖句

一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。

ヨハネ12・24

目標

一粒の麦となられたキリストの死を味わう。

導入

（松浦）

新しい学年がスタートします。新一年生にとっては、「♪ともだち百人できるかなあ」の歌のように、入学の日をワクワクと待っているかもしれないですね。事故やけがから守られて、皆が元気に過ごせるように、まず祝福を祈りたいと思います（教師は短く祈ってください）。

今日は何の日？

今日は受難週の中のパームサンデーといって、イエス様が子ろばに乗ってエルサレムに入城された日です。人々は三年の間、イエス様の数々のわざを見たり、聞いたり、体験したりして、イエス様こそローマ帝国の支配下から助け出してくださるイスラエルの王にふさわしい方だと思っていました。ろばの子に乗ってゆつたりと入城されるイエス様を見て、人々は手に手にしゅろの枝を持って「ホサナ、主のみ名によってきたる者に祝福あれ」と大歓迎しました。また、イスラエルの人々だけでなく、他国のギ

リシャ人もイエス様にお会いしたいと訪ねて来たのです。イエス様の人気は大変なものでした。

わたしの時が来た

しかし、イエス様は決して有頂天になったりされずに、子ろばの背にゆられながら入城されました。イエス様の心には、かねてから覚悟をしてきた事柄が秘められていました。それは一体何だったのでしょうか。イエス様は神の独り子であられました。クリスマスの日にこの地上に誕生してくださいましたね。その目的は、父なる神様のみに従って、全ての人の罪を背負って身代わりとなって死ぬためでした。そして、その死を通して罪の赦しと救いの道を完成させるためでした。ユダヤ人だけでなくギリシャ人、その他の人々の姿を見つめながら、イエス様は子ろばの背の上で「いよいよ時が来た」と悟られました。そして、週末には多くの裏切り、嘲り、罵りをうけて、自分は死ぬのだ、と心を決められたのでした。それで、ギリシャ人がお目にかかりたいといって来た時に、「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる」と、ご自分の死を一粒の麦にたとえて答えられたのです。

一粒の麦

皆さんは朝顔の種を植えたことがありますか？種を植えると、やがて二葉が芽を出し、次に本葉が出て、つるのび、やがてつぼみが出て、ついにきれいな花を咲かせますね。さらに、花が終ると実がなつて一粒の種から多くの種を取ることが出来ます。では最初に植えた種は一体どうなっているのか

しょう。そつと根っこを引き上げて見てください。元の種の影も形も残っていません。

一粒の麦の種が死ぬということは、自分の形を失って、何にもなくなるということを意味します。イエス様は一粒の麦のように地に落ちて、十字架で死んでくださいました。種は、その形をなくし失われても、その命はちゃんと次の種へと受け継がれ豊かに実を結んでいくのです。そのように、イエス様の十字架の死は、決して無駄にならず、豊かに実を結び、全人類の救いという素晴らしい実が結ばれ、永遠の命に至る救いが実現、完成したのです。

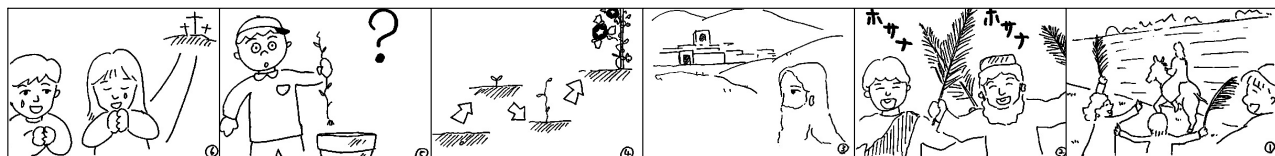
十字架の形

皆さんは、十字架の形をよく知っていますね。これは、天と地を結ぶ懸け橋の形です。イエス様は「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」（ヨハネ14・6）と言われました。私たちはイエス様の十字架の死をとおして豊かな命を与えられました。十字架の縦棒は先ほども言ったように天地をつなぐものです。では、横棒は何を意味しているでしょう。それは、人と人とを結ぶものです。「わたしは、新しいしめをあなたがたに与える。互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい」（ヨハネ13・34）。

私たちもイエス様に倣い、自分を喜ばせる生き方を捨て、人を愛して生きていくとき、豊かに多くの実を結ぶことができるのです。

♪カルバリ山♪

（ゴスペルミュージック76）



聖書 Iコリント15・12～22

テーマ 復活の初穂

序論

(鎌野)

主イエスは十字架で死なれただけでなく、三日目に復活された。十字架と復活は、両者がそろってこそ福音となる。イースターの今日は、主の復活が歴史的な事実であり、私たちの信仰と希望の根拠であることを第一コリント書から学びたい(この書は、今月もう二回扱うことになる)。主の復活から二十数年しかたっていない時でも、現代と同じように、主の復活を信じようとしなかった人々がいた。そのような人々に反論するため、著者パウロは3つの重要点をここに示す。

一、復活は歴史的事実

パウロは、コリントで伝道を始めた時から、十字架と復活を「最も大事なことでして」人々に伝えていた(3～8節)。しかし、その地を離れて四、五年たった頃(ある者が、死人の復活などはない)と言っているのを伝え聞いたのである。コリントは、ギリシャ文化の中心地の一つだった。そこに住む信者の中にはプラトン哲学の影響を受けていた人々があり、彼らは、霊魂は不滅であつても肉体は復活しないと考えていた(モルガン『コリント人への手紙』31頁)。どんな人間も、その肉体は死んだら無になってしまうので、復活などありえないとの思想である。もしそれが正しいなら、人としてこの地上に生まれ、生活された(キリストもよみがえらなかつた)ことになる。

しかし、パウロは大胆に宣言する。(「事実、キリストは：死人の中からよみがえった」と。これは多くの人々が目撃し、彼自身も体験したことだからである。十二弟子たちは、「自分たちはキリストの復活の証人である」と何度も繰り返している(使徒1・22、2・32、3・15等)。どんなに権威者が彼らを脅迫しても、彼らは、「自分の見たこと聞いたことを、語らないわけにはいかない」(使徒4・20)と、この事実を伝え続けたのである。

二、復活は信仰の基礎

パウロは、13～19節で5度も(もし)という語を用いて、キリストの復活がないならどのような結果になるかを描いている。それは、①自分たちは(神にそむく偽証人にさえる)こと、②コリントの信徒は(いまなお罪の中にいること)、③(キリストにあつて眠つた者たち(つまり死んだ信者たち)は、滅んでしまった(つまり存在が消滅してしまった)こと、④信者は(すべての人の中で最もあわれむべき存在となる)ことにまとめられる。もし弟子たちの復活の証言が虚偽とするなら、もはや彼らが伝えた福音を信じることはできない。万が一、復活がなかったとしたら、信仰の基礎が崩れてしまうのである。

しかし、福音は悪人を罪から立ち帰らせ、人々に奉仕する者へと造り変えてきた。アウグスティヌス、ルター、ウエスレー、バックストン、内村鑑三、小島伊助、マザーテレサなどを生かしてきたのは、この信仰だった。二千年の教会史を見るなら、復活は否定できないはずである。

三、復活は確実な希望

パウロが死人の復活を強調するのは、キリストの復活が事実であることを示すためだけではなく。キリストは(眠っている者の初穂として)よみがえったことを、伝えたかったのである。ユダヤ人は、収穫時に最初に結実した初穂を神にささげていた(レビ23・10)。先週、主は一粒の麦として十字架にかかられたことを学んだ。その麦は死んだが、復活という実を結んだのである。キリストは初穂として復活され、その後、多くの穂ができる。パウロはその真理を、(死がひとりの人によつてきたのだから、死人の復活もまた、ひとりの人(キリスト)によつてくると説明する。アダムひとりの罪によつてすべての人が死ぬべき者となつたのと対照的に、主イエスの贖いのみわざにより、すべての人が生かされるのだ。

(キリストにあつて眠つた者たちは、滅んでしまった)のではない。彼らは主イエスと同じように復活する。それが、キリストの復活を信じる者たちの希望だ。主の復活が事実であるからこそ、この希望は確実なのである。

結論

現代、復活の話をして信じない人が多い。しかし、死ぬことを恐れている人々もまた多いのである。私たちは、たとえどんなに馬鹿にされようとも、主の復活を大胆に伝えようではないか。パウロや弟子たちがそうしたように。主イエス以外には、古今東西どこにも復活した人はいない。だからこそ、この方こそ唯一の救い主なのだ。

研究資料

(足立)

パウロは15・3・5で福音を要約しているが、12・34では議論を深めて復活の教理を展開している。積極的にはキリストが死者の中から復活されたことを断言し、この歴史的、贖罪的な事実を否定する人たちに疑問符を投げかけている。否定面では、復活の教理を否認する結果を検討している。すなわち使徒の説教や信仰者の信頼は無駄で無力になると。復活の教理を主張しないなら説教者は全く愚かで、人々は罪の中に留まり、キリストにあつて死んだ信仰者は滅びにあり、またクリスチャンは哀れむべき存在である。このようにキリスト教信仰を攻撃し、復活の教理を崩そうとする敵対者たちは、キリスト教の土台の破壊を求めている。しかし教会はイエス・キリストに根ざし、復活の教理はキリスト信仰者の根本である。12・19節は、復活に関する論理的な議論。20・28節は、復活の現実。29・34節は、復活に関する議論。

テキスト

12 この問いかけにより、この部分の議論の中心へと道が開かれる。

13 最初からパウロは、復活の可能性を否定することとはキリスト教信仰を根底から覆すことだと主張している。福音が保持する基盤を人間の論理で除外すれば、キリスト教信仰は完全に破壊される。

14 キリストの復活は一つの独立した出来事ではない。またキリスト信仰者の復活も独立した出来事とはならない。この二つは、根拠として、概念的にも、そして神学的にも一つとして結びつけられている。

一方を否定しもう一方を認めることでは、意味を持たない。キリスト信仰者にとつては、キリストと共にある出来事として復活を経験するもの(参照ローマ6・4)。

14後半・19 ここでパウロは四つの破壊的な結論を並べている。①わたしたちの宣教はむなしく、あなたがたの信仰もまたむなし(14) キリストの復活がなければ、福音やキリスト者の信仰は実体がなく、権威も、効果も保てない。キリスト信仰者は詐欺師で欺き手となる。

②使徒たちは、偽証人にさえなる(15) 説教に關してパウロの規範は、コリントの哲学的な雄弁家とは異なつた真実であつた。もし福音に基盤がないなら、コリントに生み出されたキリスト者の群れがあつたかどうかかわからない。パウロは実用的な自己実現ではなく、真実に基づくいのちと思考の変化を呼び覚ますことに関心がある。

③あなたがたは、いまなお罪の中にいる(17)そこには罪からの解放がない。復活がなければ贖罪に關わるキリストの死は効力のないままである。なぜなら死と復活は唯一の贖罪の出来事に關する二つの側面だからである。罪と束縛から解放されることは、買い戻しがあつてはじめて新しいいのちに贖われる。キリスト信仰者は、キリストとともに彼の死と復活に結びつけられている。キリストは自らには必要の無かつた死を通られた故に、私たちに恩恵もたらされた。すなわち、罪の赦し、義認、和解。これらは、「私たちのために」という代償的な側面を持つてゐる。しかし別の側面にはキリストとの結合という表現もある。すなわち彼が生きておられる故に私た

ちも生きることが出来る。勝利のモチーフとしてキリストのみわざの意味を本質的に理解しようとするなら、復活の勝利を欠くなら骨子が無くなつてしまふ。パウロは本書5・7でも二つの側面を提示している。

④死んだ信者は破滅した。キリストにあつて眠つた者たちは、滅んでしまった(18)もし墓を超えられないなら、クリスチャンはこの世で最もあわれむべき存在だとパウロは受け止めている(19)。眠つたとは、来るべき新しい日を待ち望みつつ将来の約束を示唆する言葉である。復活がないのなら、死後の存在様式を示すどんな概念も、途方もない空想に移し換えてゐるに過ぎない。

20 初穂 は旧約に由来し、神に感謝をささげる時、収穫の最初の一部分を意味した例、レビ23・9・11。パウロはここでキリストを初穂と位置づけることで、キリストに属する人々(眠つてゐる人々)が彼の復活に与るといふ保証を明確にしている。パウロはここでキリストの復活はご自分の民への手付け、あるいは保証と理解している(参照ローマ8・11、IIコリント1・22)。キリスト以前にも、ヤイロの娘やナインの青年、そしてラザロが生き返つたが、それらは蘇生(そせい)であつた。キリストだけが死を征服し、死者の中から復活した。キリスト信仰者の体の復活は、定めの時を待たねばならない。

参考文献 榊原康夫『コリント人への第一の手紙講解』(聖文舎) Kistemaker, S.J., Corinthians(Baker), Thielton, A.C., I Corinthians(Erdmans).

聖書
タイトル
暗唱聖句Iコリント15・12〜22
イースター 復活の初穂

キリストは眠っている者の初穂として、死人の中からよみがえったのである。

Iコリント15・20

目 標 キリストの復活は初穂であることを知る。

導入

(松浦)

イースターおめでとうー！イース様が死からよみがえられたことを記念するうれしい日です。

キリストの復活はほんとうか？

十字架で死なれたイエス様の遺体は、墓に葬られ、墓の入り口には大きな石が置かれました。しかも、その石はしっかりと封印され、だれにも遺体を盗まれないようにローマの兵隊が見張っていました。なぜでしょうか？それは、イエス様が「わたしは三日目によみがえる」(ルカ24・7)と、宣言されていたからです。三日目の朝早く、マグダラのマリヤと他の女たちが墓に行きました。ところが、あの大きな石は取り除けられ、墓は空っぽです。墓の中には、イエス様の死体に巻かれていた布があるだけでした。途方にくれたマリヤは墓の外で泣き出してしまいました。しかし、よみがえられたイエス様が「マリヤよ」と声をかけてくださり、マリヤの悲しみは一変に喜びに変わりました。イエス様が弟子たちに、「わたしは十字架につけられるが、三日目によみがえる」と言われていたこと

は本当でした。イエス様は、それから他の弟子たちにも現れ、ご自分がよみがえられたことを証明なさいました。

キリストの復活がなかったとしたら？

ですが、ある人々は「キリストの復活はありえない」と否定しました。そこで、パウロ先生は「もし…としたら」と四つの「もし」を用いて、キリストの復活の事実と、私たちの信仰の土台について語っています。①もし死人の復活がないならば、キリストもよみがえらなかつた。②もしキリストがよみがえらなかつたなら、宣教は無駄になり、ないことをあるという偽証人になってしまふ。③もしキリストがよみがえらなかつたら、信仰は価値がないものとなり、今なお罪の中にいることになる。④もしキリストがよみがえらなかつたら、私たちはすべての人の中で、最もあわれむべき存在となると、キリスト復活の事実を訴えています。

初穂としてのよみがえり

しかし、事実キリストは初穂として死人の中からよみがえられました。キリストのよみがえりは、悲しんでいる弟子たちに喜びを与えるためだけではなく、それは、私たちのためでもあったのです。キリストは眠っている者の初穂として死人の中からよみがえられました。まかれた種は死んでしましますが、その中から新しい命が芽生え実を結ぶように、イエス様の十字架の死と復活の事実は全ての人を生かす命の源となったのです。「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる」(ヨハネ11・25)。私たちは誰でも、いつかは死ななければなりません。

でも、イエス様を信じるなら、私たちもやがてイエス様のように天国へ行くことを約束してくださったのです。なんと素晴らしいことでしょう。

エイズとたたかった少女

ステファニー佐久間という日系三世の少女が、アメリカにいました。四才になったばかりの時、血友病の治療のため輸血をもらい、その後元気に成長しましたが、六才を迎えた頃、また発病し血液製剤が輸血されました。なかなか学校に行けないステファニーを、元学校教師だった母は支えて、一緒に勉強をしたり遊んだりしてくれました。信仰深い母の祈りに主が応えてくださって、彼女は妹のカレンと共に9才の時洗礼を受けました。やがて10才を迎えた時、エイズと診断されました。お母さんは彼女になかなか言い出せませんでした。ついに折って、思い切って彼女に知らせたのです。彼女は「うそ、うそ、そんなはずはない」と思っても、喉がつかえて言葉がでませんでした。その晩、彼女は悲しみのどん底に陥り、全く眠れませんでした。しかし、彼女は、信仰によって立ち上がり、次のような詩を書きました。

「栄光の地」

「栄光の地についてお話しましょう。あの太陽のずっと向こうにある、小川の流れのあるところ、『死』からも、この世の苦しみや争いからも、解き放されたところ、どこにあるのか誰も知らない。しかしそこは、神様に会えるところ」。11才で生涯を閉じた少女は復活の希望に生きたのです。

♪神さまのみにくには♪

(ふくいん子どもさんびか33)



聖書 マタイ28・16〜20 テーマ 復活の主の約束

序論

(鎌野)

ある未信者から、「復活したイエス・キリストは、その後いつ死んだのですか」という質問を受けたことがある。その人は、復活を「蘇生」と同じようなものと考えていたのだろう。復活された主は、永遠に生きておられる。もちろん、今も生きておられる。そのことを示すために、主は明確な約束を与えてくださった。不信仰な弟子たちに、どのようにしてこの真理を示されたのかを、今日の聖書箇所から考えてみよう。

一、ご自身を現された

四福音書はみな、主イエスがエルサレムにおいて弟子たちに現れたことを記録している。さらにルカ以外の三福音書は、主がガリラヤにおいてもご自身を示されたと述べる。なぜガリラヤでの顕現が必要なのか。おそらくそれは、イザヤの預言が成就するためであり(マタイ4・14〜16)、また、福音宣教が始まった場所において、弟子たちを再出発させるためだったろう。しかし、この時になっても、まだ〈疑う者もいた〉。他の福音書も、異口同音に弟子たちの不信仰を記す(マルコ16・14、ルカ24・38、ヨハネ21・4等)。主イエスと行動を共にしていた弟子たちであっても、主の復活を信じるのは困難だった。だからこそ主は、何度も自分から彼らに近づき、語りかけ、ご自身が生きておられることを示されたのである。

先週学んだパウロも、最初は主イエスの復活を否定していた。しかし、主が彼に現れてくださったゆえに、信じざるを得なかった。現代でも同じである。主は、祈りの中で、人との出会いの中で、時には奇跡的な経験をおして、ご自身が生きておられることを私たちに示される。

二、権威を授けられた

主イエスは復活前にも、病を癒やし、悪霊を追い出し、嵐を静め、そして何よりも罪を赦すという権威をもっておられた。しかし、十字架の死まで従われた後に、神は「すべての名にまさる名を彼に賜った」(ペリピ2・9)。それゆえ、復活された主は、〈わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた〉と言われたのである。さらに、その最高の権威をもって、〈あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊との名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておいたいっさいのことを守るように教えよ〉と命じられた。主の権威が、弟子たちにも授けられるからである。

従うときに、最高の権威が授けられることは、聖書を貫く真理である。ペテロもマタイも、主の招きに従って弟子となった(マタイ4・20、9・9)。たとい不信仰な時があっても、主の権威が授けられているなら、大胆に宣教できる。その後の弟子たちは、まさしくそのとおりに行動した。彼らの働きによって弟子たちが再生産され、現在に至ったのである。私たちにも、同じ権威が授けられていることを忘れてはならない。

三、約束を与えられた

主は最後に言われた。〈見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである〉。これは、主イエスと三年余り一緒に過ごした弟子マタイの耳に、生涯響いていた言葉であろう。彼は、主が「その名はインマヌエル」(神われらと共にいます、との意味)と呼ばれる方であることから福音書の筆を起した。この書を記している間も、主が共におられることを実感していたに違いない。彼にとっても、他の弟子たちにとっても、これは明確な主の約束なのである。

主イエスは、二千年前に生きていた歴史上の人物というだけではない。あるいは、十字架で救いも完成されたが、今は遠くにおられる方というのではない。主は、現在も生きて、共におられるのである。時として私たちも不信仰になることがあるだろう。だがそんな時でも主は私たちから離れず、〈いつも〉共にいてくださる。私たちの状態のいかにかわからず、不信仰の時も、苦難の時も、主が共にいてくださらない時はない。この約束を一時も忘れずに歩もうではないか。

結論

主は復活され、今も生きておられるからこそ、私たちと共におられる。復活信仰は、臨在信仰に直結するのだ。今でも疑っているような不信仰な者にも、ご自身を現し、権威を授け、約束を与えてくださる主に従っていかう。私たちの教団のよりどころである臨在信仰を、まず自分のものとし、さらに次の世代に伝えていかうではないか。

研究資料

(足立)

マタイによる福音書は、復活のイエスが弟子たちに顕現された出来事は省略して、ガリラヤで弟子たちに大宣教命令を下されたイエスの姿を記して閉じる。内容を分解すると、16節は序論、17～18 a節はイエスの顕現、17 b節は弟子たちの反応、19～20 a節は大宣教命令、20 b節は保証である。

テキスト

16～17 十一人の弟子たち イスカリオテのユダがイエスを裏切った後に自殺したため11人(マタイ27:3～5)。彼らは、新約の神の民、教会の代表である。**ガリラヤ** ガリラヤで宣教を開始されたイエスは(マタイ4:12～17)、ガリラヤで弟子たちに宣教を委託された。山 どの山であるかは不明であるが、イエスは山上でしばしば栄光を現された。12弟子の選び(ルカ6:12～16)、五千人の給食(ヨハネ6:1～14)、変貌の山(マタイ17:1～8)他。**疑う者もいた** イエスと御使いの言葉(26:32、28:7、10)に従って「ガリラヤに行つて…山に登つた」弟子たちは、そこで復活のイエスに出会って礼拝したが、中には「疑う(デイスタゾー)者もいた」。11弟子以外の人々もそこにいたのかもしれないが、復活はそれほど想像を絶する出来事だったということである。イエスの水上歩行の奇跡を目の当たりにしながら、「風を見て恐ろしくなり、そしておぼれかけた」ペテロも、「なぜ疑ったのか(デイスタゾー)と叱責されたことがある(マタイ14:31)」。

18 天においても地においても 天と地という反対語を並べることによって、ありとあらゆる、と

いう意味をもたせている。いっさいの権威を授けられた これまでもイエスは、「権威ある者のように、教え」(マタイ7:29)、「罪をゆるす権威をもっていること」(マタイ9:6)を示し、「汚れた霊を追い出し、あらゆる病気、あらゆるわずらいをいやす権威」(マタイ10:1)を明らかにされてきた。しかしこれらはイエスの権威の一部に過ぎなかった。復活され、今や一切の制約から解放されたイエスに、ありとあらゆる権威が父なる神から授けられたのである(エペソ1:20～22、ピリピ2:6～11)。

19～20 a それゆえに イエスに授けられた偉大な権威こそ、大宣教命令の基盤であり、弟子たちが遣わされていく際の権威の出所でもあることを示す接続詞(ウーン)。**すべての国民を** アブラハムに与えられた「地のすべてのやからは、あなたによつて祝福される」という約束(創世記12:3)の成就のために選ばれた神の民イスラエルは、神の期待に応えることができなかったが、今や「アブラハムの子であるダビデの子、イエス・キリスト」(マタイ1:1)によつて成就されようとしている。すべての国民が弟子としてイエスの権威に服するようになることが、大宣教命令の目標である。**弟子として** 日本語聖書では多くの命令があるように見えるが、原文では主動詞はただ一つ、「弟子として」(マセーテューオー、アオリスト時制・命令形)のみである。「行つて」「バプテスマを施し」「教えよ」は分詞であり、弟子とすることの具体的内容が、「バプテスマを施し」「教え」ることなのである。イエスの弟子となるということは、信じてバプテスマを受けた後も、引き続きイエスとくびきを共に

にしてイエスに学び(マタイ11:29)、み言葉に聴従する者となることである(マタイ12:46～50)。

名 原文では単数形で、神の三位一体性(父なる神、子なる神、聖霊なる神という三つの位格において互いに区別される存在でありながら、三つの神ではなく、唯一の神としての一体性を保っておられる)を示唆している。によつて の中へ、という意味の前置詞(エイス)。**バプテスマを施し** 悔い改めと信仰によつて救われた者が、三位一体の神の御名の中へ結合されたことを証しするのがバプテスマである。

20 b いつも 直訳は、すべての日々に。順境の日も、逆境の日も、「いつも」である。**共にいる** 主は命令をお与えになる以上は、その命令を遂行するのに必要な力をも同時に与えくださるお方である。本書は、「インマヌエル…神われらと共にいます」で始まり(1:23)、「共にいる」で終わる。そして18:20にも「ふたりまたは三人が、わたしの名によつて集まっている所には、わたしもその中にいるのである」との約束がある。この臨在の約束は、荒野の40年間モーセを支え続け(出エジプト3:12)、ヨシュアをも強く雄々しくした(ヨシュア1:5)。「世の終りまで、いつもあなたがたと共にいる」という臨在の約束が、大宣教命令の保証なのである。

参考図書 内田和彦「マタイの福音書」『実用聖書注解』(いのちのことば社)、榊原康夫「マタイによる福音書Ⅶ」(みくに書店)・Carson, D.A., "Matthew's The Expositor's Bible Commentary, Vol. 8 (Zondervan) 他

聖書 マタイ28・16～20

タイトル 復活の主の約束

暗唱聖句 見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。
マタイ28・20

目標 復活の主の約束に日々生かされる。

導入

(松浦)

よみがえられたイエス様は、その後、何度も弟子たちに姿を現わしてくださり、復活の事実を確かなものとしてくださいました。

天に帰られたイエス様

よみがえられたイエス様は、40日の間、弟子たちに現れ、大切なことを教えられました。しかし、いよいよ天の神様のもとに帰る日がやってきました。弟子たちはイエス様に命じられた山に登ると、イエス様が近づいて来て、「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた」と言われました。これは、どういう意味でしょうか？それは、イエス様が今後、天地のすべての頭となって君臨されるという意味です。神様は、その力をイエス様のうちに働かせて、死人の中からよみがえらせてくださいました。そして、イエス様をすべての支配、権威、権力、権勢の上において、この世ばかりでなく、来るべき世においても万物の頭としてくださいました(エペソ1:20～22)。イエス様は、わたしはまもなく天に帰るけれども、あなたがたは、ここから出て行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊と

の名によって、バプテスマを授け、あなたがたに命じておいた一切のを守るように教えないと権威をもって命じられました。しかし、弟子たちの心は不安で一杯でした。イエス様は、天に上られる地上最後の時に、「見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである」と約束してくださいました。雲に包まれ、そのみ姿が見えなくなった天を仰ぎながら、弟子たちはイエス様の力強い約束の言葉を心にとめ、み姿が見えなくなっても、いつも自分たちと一緒にいてくださることを信じ、勇気をもって山を下って行きました。

イエス様の現在の働き

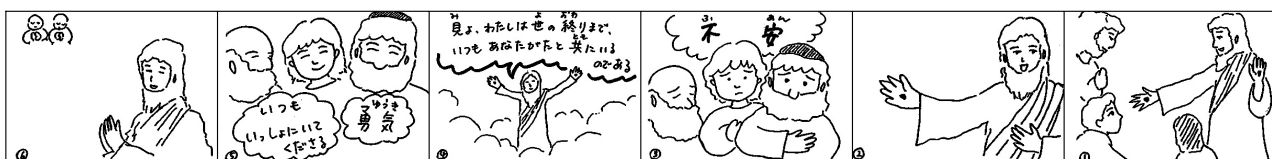
天にお帰りになられたイエス様は現在どうしていらつしやるのでしょうか。聖書を見ると、イエス様の様子が書かれています。天に帰られたイエス様は、父なる神様の右の座にあつて、私たち一人一人のためにとりなし祈っておられます。「彼は、いつも生きていて彼らのためにとりなししておられるので、彼によつて神に来る人々を、いつも救うことができるのである」(ヘブル7:25)。また、私たちが天のみ住まいに住まわせるため、場所を用意してくださいます(ヨハネ14:2～3)。

姿は見えませんが私たちと共にいてくださる、イエス様と一緒に歩みましょう。「あなたがたは、イエス・キリストを見たことはないが、彼を愛している。現在、見てはいないけれども、信じて、言葉につくせない、輝きにみちた喜びにあふれている。それは、信仰の結果なるたましいの救を得ているからである」(1ペテロ1:8～9)。

イエス様と共に歩んだ宣教師

バイオレット・マグラス宣教師は、日本を愛し日本の救いのために、その尊い生涯を献げ尽くしてくださいました宣教師です。長年、関西聖書神学校的女子寮舎監としてご奉仕されました。どのようにして宣教師として働きをされたか、先生の証に耳を傾けましょう。アイルランドで生れた先生は、生後間もない時に幼児洗礼を受けました。11才の時、お母さんが4人姉妹を残して天国に帰りました。その2年後には海軍の軍人だったお父さんが戦死し、子どもだけが取り残されました。両親のいない家庭は、とても寂しいものでした。しかし、「わたしはいつもあなたがたと共にいる」と約束されたイエス様がどんな時も支え導いてくださいました。先生は、はつきりと救いの体験をしたのは15才のときです。その年開かれた外国伝道大会の奉仕をする中、日本伝道のために神様からの召しをいただきました。その後、実際に日本の地を踏むまでの道のりは遠いものでしたが、一つ一つの困難が取り除かれ、確かな導きをもって日本に遣わされてきました。たとえば、日本に来るために船旅でしたが、荷物を入れる大きなトランクがありません。また、船賃が足りません。どんな時も、イエス様を信頼して祈っていく時、不思議に道が開かれ、必要が満たされ、最後まで変わらずイエス様は共に歩んでくださいました(『主の恵みを数えて』バイオレット・マグラス著。復活の主の約束はなんとすばらしいものでしょう。♪主イエスとならば♪

(子どもさんびか〔ホーリネス〕55)



聖書 Iコリント15・1-11

テーマ 伝えられた福音

序論

(鎌野)

先々週学んだように、復活を信じようとししない人々に対して、パウロは復活の重要性を明確に示した。しかし、死があつてこそ、復活は意義をもつことを忘れてはならない。主イエスが死ななかつたなら、復活はありえなかつた。十字架と復活はコインの両面であり、福音の二本柱である。今週は、先々週のテキストの直前の段落から、パウロが命をかけて伝えようとしていた福音とはどのようなものであつたかを学ぼう。

一、十字架の福音

パウロは、最初にコリントで伝道を始めた頃(このことを回想して、へわたしが以前あなたがたに伝えた福音、あなたがたが受けいれ、それによつて立つてきたあの福音を、思い起してもらいたい)と訴える。彼は、この手紙の初めの部分で、「わたしはイエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリスト以外のことは、あなたがたの間では何も知るまいと、決心した」と記した(2・2)。パウロにとつては、ギリシャの知識人には愚かにしか思えない「十字架の言」こそが救いの基盤であつた(1・18)。だから彼は、へわたしが最も大事なことであつたあなたがたに伝えたのは、わたし自身も受けたことであつた。すなわちキリストが、聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために死んだこと、そして葬られたことと明言する。

確かに福音は十字架から始まる。罪のない神の御子が、私たちの罪の身代わりとなつて十字架で死なれたことを信じることにより、罪は完全に赦されるのだ。これは、イザヤ書53章をはじめとして、旧約聖書に書いてあるとおり、このことにはかならない(研究資料参照)。パウロはこれを経験し、さらにそれを伝えようとしたのである。

二、復活の福音

しかし、パウロが伝えようとしたことはそれだけではない。さらに、(聖書に書いてあるとおり、三日目によみがえつたこと、ケパに現れ、次に、十二人に現れたことである)。もし主イエスが十字架で死なれたままであつたなら、偉い人物が宗教的権威者に誤解され、無実の死を遂げただけの話となつてしまう。復活されたからこそ、主イエスが神の御子であることが実証されたのである。しかも、先週学んだようにケパ(ペテロ)や十二弟子、また(五百人以上の兄弟たちに、同時に現れ)なかつた(これはガリラヤでの顕現であろう)。さらに、主イエスの弟の(ヤコブに現れ、次に、すべての使徒たち(十二弟子以外も含めて)に現れ)た。その中の(大多数はいまなお生存している)ので、目撃証言を聞くこともできるのだ。

先々週学んだように、もしキリストが復活されなかつたとしたら、私たちの信仰は根底から崩れ去つてしまう。キリストの復活がれつきとした事実だからこそ、それは私たちの信仰の基盤となり、福音となる。永遠の命が保証され、からだのよみがえりは確実な希望となるのである。復活についても、詩篇

16篇をはじめとして、多くの預言があることも注目したい(研究資料参照)。

三、人を変える福音

回心前のパウロも、主の十字架と復活のことについて聞いていたが、それは決して彼にとつて福音ではなかつた。かえつて彼は、(神の教会を迫害した)のだ。しかし、キリストは(いわば、月足らずに生れたようなわたしにも、現れた)と、彼は告白する。その結果、パウロの生き方は逆転した。神の恵みによつて示された十字架と復活の福音は、迫害者パウロを宣教者パウロに変えたのである。彼は続けて言う。(神の恵みによつて、わたしは今日あるを得ているのである。そして、わたしに賜つた神の恵みはむだにならず、むしろ、わたしは彼らの中のだれよりも多く働いてきた)。

主の死によつて罪を赦され、主の復活によつて永遠の命の確信を与えられた者の生き方は、確実に変えられる。十二弟子たちは言うに及ばず、兄を救い主と信じなかつた主の弟ヤコブ(ヨハネ7・5)も後には初代教会の祈り手となり、指導者となつた(使徒1・14、15・13)。現代でも、十字架と復活の福音は、神に反逆する人を神に従う人へと造り変えていることは、誰も否定できない。

結論

パウロは自分に伝えられ、経験したこの福音を黙つておくことはできず、命をかけて伝えたのである。私たちも、この福音に生きよう。そして、できるだけ多くの人々に伝えよう。

研究資料

(足立)

15章は二つの主要内容に分けられる。1〜34節は、体の復活の確実性に関するパウロの議論。35〜58節は、復活の体の性質をパウロは論じている。最初の議論も二つの区分に分けられる。1〜11節はキリストの体の復活の事実を繰り返し語っている。12〜34節は、不信を打破しキリスト復活の事実に対する信頼を説いている。そして1〜11節は、三つの構成で成り立っている。①パウロが復活を取り扱う導入(1〜2)。②キリストの死と復活について初代キリスト者の信条、或いは信仰告白を列挙(3〜8)。③復活の主の証人として、パウロのユニークな役割を強調(9〜11)。

テキスト

1 ここでパウロは体の復活という主題に入る備えをしている。彼は主にある兄弟として伝えようとする。但し彼が伝える福音は、他の使徒たちが伝達した内容と違わない。それは最初から一貫して主張してきたもの。それにもかかわらずパウロはキリストの肉体の復活と信仰者のそれを、詳細に教理として教えようとしている。パウロの初期の手紙において、既に彼は復活の教理を信仰者たちに知らせてきた(例、使徒13:30、ガラテヤ1:1)。しかしこの15章で彼は、この聖書の教理の包括的な講解を提供している。この意味での福音提示。パウロはダマスコ途上で復活の主イエス・キリストから福音を啓示された(使徒9章)。

2 神は福音を通してキリストにある人を救われる。コリントの信仰者たちも福音によって救われ

たのだが、彼らはキリストの福音に留まらなければならぬ。他の人間的知恵によるならば、彼らの信仰は空洞化し、価値無しとなる。信仰はキリストの教えに堅く立ち、福音の適用として誠実な歩みが求められる。この意味で、気まぐれに信じただけではない、と言える。キリストに留まり、神の言葉に従い続ける信仰者は安全で確かである。

3〜5 福音はパウロが構成した教えではない。彼は主から福音を受け取ったと主張している(ガラテヤ1:12)。パウロがイエスから受けた福音と十二使徒が初期キリスト教信仰告白として用いた信条とは一致する。この要約は聖書に基づいている。聖書に書いてあるとおり 福音は旧約聖書に根ざし、出現したものということ(参照ルカ24:45〜46)。パウロにとつて福音の基本的な教えは四つの贖(あがな)いの事実にある。①キリストが私たちの罪のために死んだこと。②葬られたこと。③三日目によみがえったこと。④ケバに現れ、次に十二人に現れたこと。これらの事実は、パウロの福音提示において最も重要な内容である。

①死に関して、パウロはイエスではなくキリストという名を使っている。これはメシヤとしての職務上の役割を意味する。旧約の言及に関してパウロはイザヤ書の預言を指しているのであろう(イザヤ53:5〜6、8〜9)。イエスは詩篇22篇、イザヤ書53章のメシヤとしての預言を成就した。主の晩餐(ばんさん)に際してイエスは、メシヤはご自分の民の罪のために死ぬという教理を文字通り提示された(マタイ26:28)。わたしたちの罪のために と言う概念はパウロの手紙の至るところに出

てくる(例、ローマ5:8、ガラテヤ1:4、エペソ5:2、テトス2:14)。手短に言えば、キリストは神の前に私たちを代表しただけではなく、十字架で私たちの罪のために死ぬことにより私たちの立場をとられたと言うこと。贖罪の教理は以下を参照(ローマ3:25〜26、5:9〜19、IIコリント5:21、Iヨハネ2:1〜2、等)。

②葬りに関して。福音書記者たちは別として、パウロだけがイエスの葬りに言及している(使徒13:29、ローマ6:4、コロサイ2:12)。イエスの葬りは、死の現実を振り返り、復活の特性を全面に現すことを意味する。

③復活に関して。イエスの死と葬りに関しては、過去における唯一の行為を述べるために不定過去時制が使われている。しかしよみがえった と言う動詞の時制は完了形で過去に起こった行為を意味するが、現在との関連性を持つている参照15:12〜20。すなわちイエスは死者の中から復活して、復活の状態で彼の命の維持を意味する。また受動態は、暗示された主体者で神を意味する。ペテロもパウロも彼らの説教の中でイエスの復活に関して肉声で語るとき、神が死者の中からイエスを復活させたと言っている(使徒3:15、4:10、5:30、10:40、13:30)。空の墓の証拠は、イエスの復活が体を伴うものであったことを強調している(マタイ28:5〜6、マルコ16:5〜6、ルカ24:3〜4、ヨハネ20:6〜8)。

参考図書

Blomberg, C., I Corinthians (Zondervan), Kistemaker, S.J., I Corinthians (Baker).

聖書
タイトル
暗唱聖句Iコリント15・1～11
伝えられた福音

神の恵みによって、わたしは今日あるを得ているのである。

Iコリント15・10

目 標 最も大切なものとして伝えられた福音を信じる。

導入

(松浦)

皆さんは、ゲームが好きですか？PS3（プレイステーション3）の販売日が発表されるやいなや、徹夜して並んで買う人々のことがニュースで放送されています。新しいゲーム発売のニュースに、ゲーム好きの人の心が騒ぎ立ち、もうじつとしておれないのでしょうか。

伝えられた福音の内容

グッドニュースのことを福音といいます。死人がよみがえるというニュースほど、グッドニュースはありません。かつてキリスト信者を迫害し、捕えては牢屋に放り込んでいたパウロは、ある日、復活のイエス様に出会います。その時から、パウロは全く変えられ、パウロの心の中には、よみがえられた生ける主が住んでくださり、励まし支えてくださるという経験をしました。その後、神様の召命により、この素晴らしい福音を人々に伝える伝道者となりました。パウロが最も大事なことからして伝えた福音とは何だったのでしょうか。①イエス様が私たちの罪のために死なれたこと、②葬られたこと、③三日目によみがえったこと、④ペ

テロや弟子たちに姿を現わされたことです。

復活の確かさの証拠

人々の中には、イエス様の復活を「そんなことはあり得ない」と否定する者たちがいました。そこで、パウロは、実際に復活の主に出会った人々の証言をあつめて人々に伝えました。まず、最初に①ケパ（ペテロ）に現れたこと、②次にユダ以外の十二弟子に現れたこと、③50人以上の兄弟たちに同時に現れたこと、④主の兄弟ヤコブに現れたこと、⑤すべての使徒たちに現れたこと、⑥最後にパウロ自身にも現れてくださったこと、と紹介しています。この証は、二〇〇七年の今日まで続いています。あなたも、復活の主にお会いしたと証できるでしょうか。イエス様は今も生きておられる方ですから、私たちもお会いできるのであります。

福音に生きる人

パウロは復活の主にお会いした時、その生き方は180度変えられ、今までとは全く違った生き方をするようになりました。彼は命がけて、イエス様の十字架と復活の事実を宣べ伝える生涯を送りました。彼は、自分の血筋も学歴などもキリストを知る知識の絶大な価値のゆえに、価値の無いもののように思っている（ピリピ3・4～8）、と告白しています。そして、キリストのうちに自分を見出すようになるため、福音に生きる人になりました。彼は自分の生涯に現された神の恵みを回顧し、神の恵みによって、私は今日あるを得ているのであると証しています。また、彼は聖書の中に13の手紙を書き残していますが、ローマ書以外の

すべての手紙の最後に、主イエスの恵みが共にありますようにと、祝福の言葉を書き添えています。

現代の証人

今の時代にも、パウロのように福音に生きる人々はたくさんいらっしゃいます。アメリカの作曲家家ビバリー・シエーは、人々から賞賛されその名声は、アメリカ全土に及ぶほどのものでした。ある時、「キリストにはかえられません」の詩に触れた時、彼はキリストの十字架と復活の恵みこそが、すべてに勝るものだと思われ、あの有名なメロディが生み出されたと言われています。その歌詞の中には、「キリストにはかえられません。有名なひとになることも、人のほめることばも、この心をひきません。キリストにはかえられません。世のなにもものも」とあります。

瞬きの詩人といわれる水野源三さんも幼い日に病気を患った結果、重度の障害を持つ身となりました。しかし、キリストに出会ってからその生き方は変えられ、素晴らしい詩を数多く残しています。「復活されたキリストの 御姿を見たその時に わが心から わが心から 疑いはたちまち消え去る 復活されたキリストの 御声を聞いたその時に わが心から わが心から 悲しみはたちまち消え去る 復活されたキリストの 御愛に触れたその時に わが心から わが心から 憎しみはたちまち消え去る」と。

私たちの一週間の歩みの上に、主の恵みが豊かにあるようにと祈りましょう。

♪神のお子のイエスさま♪

(ふくいん子どもさんびか74)



聖書 I コリント 15・50～58

テーマ 福音の勝利

序論

(鎌野)

十字架と復活の福音は、パウロを偉大な宣教師に造り変えただけでなく、その後二千年間、多くの人々をも造り変えてきた。福音には、勝利の力があるからだ。今月、すでに2回にわたって学んできた「復活の章」、その大団円と言うべき本日の箇所から、福音を信じた者はどのような勝利を得ることができるのかを探ってみよう。それは以下の3点にまとめられるだろう。

一、死に対する勝利

「肉と血とは神の国を継ぐことができないし、朽ちるものは朽ちないものを継ぐことがない」とは、神の国に入る時には、現在の朽ちる肉体ではなくなるという意味である。直前の段落の表現を用いるなら、復活のとき、肉のからだは霊のからだとなり、土に属している形は天に属している形をとるのだ。ただし、それは「主の来臨の時」であることを忘れてはならない（I テサロニケ 4・13～17）。すなわち、主が再び地上に來られる時、〈終りのラッパの響きと共に〉、死人は朽ちない者によりみがえらされ、またその時に生きている者たちのからだも、朽ちないからだに（またたく間に、一瞬にして変えられる）。〈死ぬものは必ず死なないものを着ることになる〉のである。

これはまさに「福音」だ。私たちは過去に多くの人々の死に直面し、涙を流してきた。つらい闘

病生活も見えてきた。現在も、痛みに苦しむ人々がたくさんいる。しかしそのような朽ちる肉体が、再臨の時には朽ちないからだに変えられるのだ。この時、私たちは大胆に〈死は勝利にのまれてしまった〉と宣言できる。どんな偉人もどんな金持ちも、死には勝てなかったが、福音を信じる者は、死に対して勝利を得ることができるのである。

二、罪に対する勝利

パウロがここで、〈死よ、おまえのとげは、どこにあるのか〉と言っていることに注目しよう。引用された旧約本文にはない〈とげ〉という語を用いるのは、彼が「肉体に一つのとげ」をもっていたからかもしれない（Ⅱ コリ 12・7）。それは彼の肉体を苦しめたのみならず、罪と死と律法の間を思い出させた。〈死のとげは罪である。罪の力は律法である〉と記したのは、そのためだろう。それは、「律法によって罪が何であるかが示され、その罪がとげのように自分を苦しめ、死に至らせるものとなった」という意味だと思われる（ローマ 5・12 以降参照）。しかし、パウロはその直後に確信をもって叫ぶ。〈感謝すべきことには、神はわたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちに勝利をたまわったのである〉。

死に対して勝利を得られるのは、罪に対して勝利を得ているからにほかならない。未来の希望は、過去の事実によって確かなものとなる。主イエスが私たちの罪の身代わりになってくださったという十字架の福音が、罪の赦しの確信を与え、勝利をもたらすのである。

三、労苦に対する勝利

最後にパウロは、この手紙を読んでいるコリントの信徒に言う。〈だから、愛する兄弟たちよ。堅く立って動かされず、いつも全力を注いで主のわざに励みなさい〉と。コリントの教会には様々な問題が山積していた。しかし、十字架と復活の福音に生きるなら、決して動じることはない。それは、〈主にあつては（新共同訳では「主に結ばれているならば」）、あなたがたの労苦がむだになることはない〉からである。この地上で様々な労苦し、ついに死を迎えたとしても、主イエスと結ばれているなら復活は約束されている。その労苦には必ず報いがともなうのである。「罪の支払う報酬は死である。しかし神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスにおける永遠のいのちである」（ローマ 6・23）。

「死んでしまえば終わりだから、必死に働いて苦勞してもむなし」と考える人と全く違った原則がここにある。主イエスと同じように十字架を負って歩む生き方には、報いが伴っている。神と人に仕える人生は、決して無駄になることはないのだ。これは現在の労苦に対する勝利である。

結論

過去の罪に対する勝利と、未来の死に対する勝利は、現在の労苦に対する勝利を生み出す。十字架と復活の福音は、日々の生活における生きがい、私たちにもたらしてくれる。苦しい試練があるかもしれない。しかし、必ず勝利の日があることを信じて、雄々しく歩んでいくのではない。

研究資料

(足立)

とても長い15章の結論部分である。パウロはここでキリスト信仰者がどのように自らの新しい霊的な体を受け止めたらよいか、新しい段落で始めている。彼は勝利で結論づけている。既に彼は復活を否定する者たちの質問(15・35)に十分答えてきた。彼は死すべき人間の体が再び復活されるのではなく、滅びない永遠のからだに変えられることを教えている。イエス・キリストは罪と死に對する勝利者であつて、私たち信仰者は彼とその勝利を共有する。

テキスト

50 パウロは断言的に語りかけている。**肉と血とは神の国を継ぐことができない** 肉と血という表現は、人間誰しもがもつ腐敗する体を示している。人の肉体の部分は、質的に新しくされ且つ榮光化された体に変えられるために、滅びなければならぬとパウロは教えている。ところで神の国を継ぐと言う内容と肉と血が結びついているが、この言い回しは何を意味するのか。それは存在している状態で死すべきからだは究極的な神の臨在の前に入ることは出来ないという意味である。神が全ての聖徒への約束を成就されるとき、贖_{あがな}われた者たちは神の国を受け継ぐ。受け継ぐという概念は、死者の復活と同じ意味を持つている。神の支配の最終段階は、この世を統治する諸々の力に全くとられない。**朽ちるものは朽ちないものを継ぐことがない** 神の復活の賜物は弱さや腐敗から完全に自由であることを意味している。

51 ここで、あなたがたに奥義を告げよう 奥義とは、キリスト信仰者の将来の変容について、パウロを通しての神からの啓示を意味する。**わたしたちすべては、眠り続けるのではない** パウロが「眠る」と書くとき、死を婉曲的に語っている(15・6、18、20)。キリスト再臨時に終末を生きる信仰者は変えられ、主にある死者たちも同様である参照Iテサロニケ4・15〜17)。終わりのラッパの響きと共に、またたく間に、一瞬にして変えられる 終わりのラッパは、復活の出来事を告げる音を意味する。このラッパの一吹きは贖いの歴史の最終章となる(参照マタイ24・31、Iテサロニケ4・16)。終わりの時の変容は長い過程を伴うものではない。それは一瞬にして起こる。

52 最も短い時間内に復活と変容が起こる。死人は腐敗しない状態によりがえり、キリストの到来に生かされる人々に変容される。パウロが **わたしたちは変えられる** と言うが、それは墓にいる者も生きている者も、信仰者すべてが(パウロ自身も)含まれる。

53 パウロは変容される性質を引き出し、体の腐敗と死ぬべき運命の停止を選び出している。体が腐食する性質は将来にあるいのちには全く起こりえない。パウロは「この」と言う言葉を4回(53〜54節)用いて、現在と将来の状態の間にある連続性を強調している。

54〜55 この手紙の終わりの部分でパウロは旧約から預言的な箇所を引用している(イザヤ25・8、ホセア13・14)。死は勝利にのまれてしまった パウロは死を主語にしているが、動詞は受動態である。

つまり神が死の力を除外したことを意味している。そしてイエスの死に對する勝利を想起し信仰者すべての復活を待ち望みつつ、パウロは歓喜の歌を燃え上がらせている。キリストの最後の敵(15・26)として力行使してきた死でさえも、神が破滅させることをパウロは知っている。**死よ、おまえの勝利はどこにあるのか。死よ、おまえの負けはどこにあるのか** パウロはホセアから預言を引用し、神がイスラエルの子たちを墓から贖い、彼らを死から救うと記している。死は極めて有害な敵として人々を悩ませてきた。しかしキリストが死のとげを抜き、彼にある人々に對しては害無しとする。

56 罪は死の原因であり、罪の自覚は律法を通してくる。手短かに言えば律法には原因として働く機能がある。また律法は神に對して犯した罪に光を投げかける。律法がなければ罪は死んだものである(ローマ7・8)。律法それ自体は良いもので、罪深い感情を起こさせる(ローマ7・5)。律法は罪人に死への自覚と責めを与える。従つて罪人は律法の要求を満たすことが出来ない故、律法は死の道具となる。

57 けれども死と罪と律法を征服した勝利者がいる。キリストが死に對して勝利を得た(ローマ6・9)。事実彼は死を滅ぼした(IIテモテ1・10)。彼は律法の要求を満たし、私たちのために呪いとなることで、律法の呪いから私たちを解放した(ガラテヤ3・3)。

参考図書 Kistemaker, S.J., I Corinthians (Baker).
Morris, L., I Corinthians (IVP).

29日 礼拝メッセージ例

聖書 Iコリント15・50～58
 タイトル 福音の勝利
 暗唱聖句 終りのラッパの響きと共に、またたく間に、一瞬にして変えられる。 Iコリント15・51
 目標 福音については完全な勝利に導くと確信する。

導入

(松浦)

皆さんの中で、マジックショーを見たことがある人いませんか？たとえば、ハンカチが一瞬のうちにハトに変わったり、千円札がぱつと一万円に変わったりしてびっくりします。

一瞬にして変えられる

聖書には、もつと素晴らしいことが書かれています。終わりのラッパの響きと共に、またたく間に、一瞬にして私たちは死なない体に変えられると約束されています。これはいったいどういうことでしょうか。雲に包まれて天にお歸りになられたイエス様が、再び地上に來られる時、終わりのラッパの響きが鳴り渡ります。その時、キリストにあつて死んだ人々が、まず、最初によりがえり、生き残っている私たちが彼と共に引き上げられ、空中で主にお会いし、いつも主と共にいることができるようになりますと書かれています（Iテサロニケ4・16～17）。その時、死人は朽ちない者によりがえられ、生き残っているものたちの体も、またたく間に變えられ、死なないものをきて、主と共に生きる者と變えられるのです。

死に対する勝利宣言

「死は勝利にのまれてしまった。死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか。死よ、おまえのどげは、どこにあるのか。」

死は愛する者を引き裂く無残なものです。つい最近のことですが、かつてのCSの生徒のTさんのお母さんが亡くなられ、葬儀に参列しました。元看護士の若くて美しいお母さんが、ついに力尽きて亡くなったのです。「Tちゃん、成人式の晴れ姿をお母さんに見てもらったの？」と問うと、「はい、とても喜んでくれました。その後、意識が亡くなり今日の日を迎えました」。成人式の一週間後のことでした。44才の若いお母さんの死は、とてもつらく悲しいものでした。

どんな人にも死がやってきます。しかし、聖書には恐ろしい死に勝利する秘訣が書かれているのです。

罪と律法からの解放

「死のどげは罪である。罪の力は律法である」と書かれているように、アダム以来の罪のゆえに人は死ぬものとなったのです。律法そのものは、聖なるものですが、私たち人間はそれに従い得ない弱さと罪をもっています。「わかっちゃいるけどやめられない」。皆さんも、自分の心に手をおいて考えてみてください。自分はこうしたいと願いをもっている、かえって自分の憎む事をしている、それを実行する力がない、これはいけないこととわかっていてもやめられない、こんな心の弱さを持つています。それを、パウロは内に宿っている罪だと教えています（ローマ7・7～25）。このど

うしようもない罪のとりこになっている私たちの身代わりとなって、イエス様が十字架で死んでくださり、罪のとりこから解放してくださったのです。そして、イエス様を信じ受けいれる者の心の王座に住んでくださって、私たちを助け、導いてくださるのです。なんとうれしい救いでしょうか。ハレルヤですね。

最後のおすすめ

最後に、パウロはこの手紙を読んでいる人々におすすめてしています。「堅く立つて、動かされず、いつも全力を注いで主のみわざに励みなさい。主にあつては、あなたがたの労苦がむだになることはありません」と。

救われた私たちはイエス様と共に生き、主のわざに励むものと變えられています。ですから、私たちの労苦は、決して無駄になることがないと約束されているのです。うれしいことですね。しかし、私たちの、主にあるわがが必ず実を結ぶものになるとは限りません。一生懸命勉強しても希望の学校に合格しないかもしれない。一生懸命スポーツに励んでも、金メダルをとることができないかもしれない。しかし、そんな時、もうダメだとあきらめないでください。神様はあなたの心を見て、あなたの努力に必ず報いてくださるからです。大切なのは、人の評価でなく、天の永遠の神様の評価です。「何をなしたか」でなく、「何であるか」が主の前にとっても大切なことです。勝利の主を見上げて日々前進しましょう。

♪主イエスと共に♪
 （ふくいん子どもさんびか90）



聖書 ルカ24・50～53

テーマ キリストの昇天

序論

(鎌野)

5月の単元は「聖霊に満たされて」である。十字架と復活の福音は、聖霊の降臨によってさらに確実なものとなる。ただ聖霊が下られるためには、主イエスの昇天が必要だった。昇天は、復活と同様、主イエスが神の子であることを示す出来事だ。ルカは、福音書では簡潔に昇天の記事を記すが、使徒行伝では詳述しているのだ、その1章の前半部も読んでいただきたい。これらの箇所から、昇天には3つの目的があったことが教えられる。

一、祝福を与えるため

主は弟子たちを（ベタニヤの近くまで連れて行き、手をあげて彼らを祝福された）。ベタニヤはオリブ山のふもとにあるので、使徒1・12と矛盾するわけではない。手をあげて祝福するのは、旧約聖書においては、犠牲をささげ終わった後の祭司がなすべき重要なつとめであった（レビ9・22、民数記6・22～27）。そして主は、「祝福しておられるうちに、彼らを離れて（天にあげられた）」。弟子たちの目には、一生涯、主のこの姿が焼き付いて離れなかったに違いない。

十字架上でご自身を犠牲とされ、その後昇天された主イエスは、「天にあつて大能者の御座の右に座し、…真の幕屋なる聖所で仕えておられる」（ヘブル8・1～2）。そしていまだに遅々とした歩みしかできない私たちを訴え、罪に定めようとする

者たちに対して、犠牲となられたご自身の血をもつてとりなしてくださっているのである（ローマ8・33）。この祝福のわざは今も続いている。主の昇天の目的は、まずここにあった。

二、聖霊を遣わすため

主は、この直前に「わたしの父が約束されたもの（聖霊）を、あなたがたに贈る」と言われていた（49節）。使徒行伝でも同じことが約束されている（1・4、5、8）。すでに最後の晩餐の席上で、主は「わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主は来ない」と仰せられた（ヨハネ16・7）。肉体をもたれた主イエスがおられる間、弟子たちは主に依存していた。だから主が逮捕された時、彼らは蜘蛛の子を散らすように逃げていった。復活の後であっても、トマスは主を見るまで信じることができなかった（ヨハネ20・29）。さらに、主イエスが目に見える姿のままでおられるなら、全世界に出て行くべき弟子たち一人一人と一緒に行くことはできない。

現在でもそうである。目に見える姿であるなら、主イエスは、全世界に住むクリスチャンと共にいることはできない。聖霊として一人一人の内に臨んでくださってはじめて、「世の終りまで、いつもあなたがたと共にいる」との約束が実現する。「真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれる」との約束どおり、主イエスの恵みの深さを味わい知ることができる。昇天は、聖霊が臨むためにどうしても必要なことだった。

三、再臨を待望させるため

主が昇天された後、弟子たちは「非常に喜びをもつてエルサレムに帰り、絶えず宮にいて、神をほめたたえていた。何が彼らにこのような喜びを与えたのだろうか。使徒1・11がヒントになるだろう。ここで、御使いと思われる人物が、「あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる」と言っている。弟子たちの喜びは、再会を待ち望む喜びである。愛する者としてしばらく別れてはいるが、必ず会える日があることを信じている者の喜びである。

「会うは別れのはじめなり」との格言があるが、弟子たちにとっては、「別れは会うのはじめなり」だった。再臨の日がいつになるかは示されていない。しかし、必ずその時があると彼らは信じていた。パウロは、自分が生きている間に主の来臨があることを確信していた（1テサ4・15）。そしてこの期待は、現在のクリスチャンにもあてはまる。聖書によって主イエスの素晴らしさを知る者は、このお方に会いたいと切に願う。3月に学んだように、これは小羊の婚姻の日であり、その日のために、装いを整えるのである。昇天の目的は、再臨の信仰をもたせるためでもあった。

結論

昇天された後、主の姿は私たちの目に見えなくなった。しかし、天においては父なる神の右に、地においては私たちの内におられ、さらに再びおいでになる。この信仰を堅く保ちたい。

研究資料

(足立)

主イエスの昇天に関しては、ルカの第二巻（使徒1・9～11）に詳述されている。彼は、ここでは主な事実を提示するにとどめ、主を拝しつつ喜んでゐる弟子たちを、生き生きと私たち読者に伝えている。その説明は極めて短い。ルカは既に多くのことを記し、間違いなく第一巻を終わろうとしている。彼は昇天を詳細に記述してはいないものの、起こったことが事実であることに変わりはない。

文脈としては24・36に始まったイエス復活後の出現が続いているが、背景は変わっている。イエスはエルサレムを離れ、オリブ山のベタニヤに弟子たちを導いている。イエスは手を上げて弟子たちを祝福している間に、天に挙げられていった。イエスを礼拝していた弟子たちは大いなる喜びをもってエルサレムに戻った。そこで彼らは約束の聖霊を待ち望みつつ絶えず神を賛美して宮にいた。これまでルカはイエスの昇天に関して、私たち読者に十分な備えを与えてきた。イエスはエルサレム（十字架）への旅の目的を、「天に上げられる日」（9・51）と位置づけておられる。十字架前夜の不当な裁判においてイエスは、「人の子は今からのち、全能の神の右に座する」と言及しておられる（22・69）。そして、エマオ途上の弟子たちにキリストの苦難と死は、「栄光に入る」ために必然であつたと語られた（24・26）。その成就として24・51がある。

また本福音書を閉じるにあたってルカは、信者

の特権である、神を賛美する生活を強調している。実はルカ福音書はイスラエルの民が宮で祈り礼拝をさげることから始まった（1・9～10）。そして御子の降誕を説明する中心には、神への賛美があつた（1・46～55、64、68～79、2・13～14、20、28）。これは本福音書に一貫して見受けられることでもある（5・26、7・16、13・13、17・15、18・43、23・47）。ルカは福音書を書き終えるにあつても神への賛美を忘れていない。そして、み言葉の真実を確かに知ることにより、私たち読者にも、神賛美に参加するよう呼びかけているかのようである。

テキスト

50 イエスは彼らをベタニヤの近くまで連れて行き とあるが、使徒1・12によればイエスの昇天はオリブ山で起こったことがわかる。ベタニヤはオリブ山に接している（参照ルカ19・29）。このことから、ベタニヤはオリブ山の斜面にあつて、イエスの昇天はその丘のどこかで起こったことがわかる。**祝福された**（ユウロゲオー）ということばをルカはしばしば用いている（1・42（2回）、64、2・28、34、6・28、9・16、13・35、19・38、24・30、51、53）。**手をあげて** という行為を、祭司（参照レビ9・22）としての行動と読み込む必要はないであろう。ルカは祭司としてのイエスに強調点をおいてはいない。大切なのは、本福音書におけるイエスの最後の行為が弟子たちを祝福し配慮されたという点にある。

51 ルカは、しばしば超自然的に離れる姿を記している（ルカ1・38、2・15、9・33、24・31、使徒10・7、12・10、参照、創世記17・22、35・

13、士師6・21、13・20）。昇天はイエスの仲保者としての権威を証明するものである（使徒2・30～36）。また昇天はイエスの地上での生涯の終わり以上に、天における統治の始まりを意味する。イエスの大祭司としての働きに関しては、ヘブル2・3章、7～10章を参照。

52 ルカ4・7～8の光によるなら、弟子たちのイエスへの礼拝は、十字架および復活を経て昇天されるイエスこそ聖なる神ご自身という認識をあらわしている。何よりもキリストの復活により、これらの弟子たちは神との関係を力強いものにする事が出来た。そして礼拝こそ昇天への応答であつた。もはや弟子たちには、疑い、不信仰、恐れ等（24・11、19～25、37～38、41）は全くない。彼らは **非常な喜び**（参照2・10）を抱いてエルサレムに戻った（参照ヨハネ14・28）。すべての疑い、問い、恐れは取り除かれた（24・11、19～25、37～38、41）。

53 本福音書の出来事は宮で始まり（1・5～23）、宮で終わっている。またルカは、エリサベツ、マリヤ、ザカリヤ、御使い、シメオンの賛美（1～2章）で記述を始めたが、終わりにあたって弟子たちの絶え間ない神賛美で福音書を閉じている。偉大なのは、神の真実である。ルカは読者にこのことを心に留めるよう切望したのである。

参考図書 Bock,D.L., Luke 9:51-42:53, (Baker),

Hendriksen,W., The Gospel of Luke (Baker),

Morris,L., Luke (IVP),

Stein,R.H., Luke (Broadman).

聖書
タイトル
暗唱聖句ルカ24・50〜53
キリストの昇天
祝福しておられるうちに、彼らを離れて、天にあげられた。
ルカ24・51

目標 キリストの昇天の深い恵みを知る。

導入

(光田)

皆さんはこの春、クラスメートや先生がどこか遠くへ転校したり、引越したりするのを見送ったでしょうか。駅の改札口や、新幹線のプラットフォーム、飛行機を見送った人もいるかもしれません。別れは、ちょっとしたさびしい気持ちになります。今日はイエス様が弟子たちの目の前で天に帰られることです。弟子たちは復活されたイエス様との再会を喜んでいました。しかし、目に見えるイエス様からは、しばらく別れなければならない日が来たのです。天に帰られるイエス様のお姿から、私たちへのメッセージを聞きましょう。

手をあげて

イエス様は、復活なさってから40日の間、何度もお弟子さんたちの前に姿を現され、天国のことをお話になりました。その中には、「父の約束を待っていないさい」というお言葉もありました。十字架にかかられる前に教えられた聖霊の約束です。イエス様が去って行かれるなら、代わりに別の助け主が来られるのです。ですから、決して悲しむことではないのです。

別れるとき私たちは、「バイバイ、またね、元気でねー」と言って手を振ります。イエス様の別れの様子はどうだったのでしょうか。私たちと同じように片手を上げてさようならをされたのでしょうか。いいえ、そうではありません。

イエス様は堂々と、十字架の釘跡のある両手を高く上げられ、祝福されたのです。私たちが毎週、牧師先生から祝福を受けているのは、このときのイエス様の祝福を受けているのと同じなのです。祝福は、私たちがこの世で輝いて生活するように、神様によって遣わされるとき祈りです。

旧約聖書で祝福の祈りをささげたのは、大祭司です。大祭司は、神様と民との間に立つて、執り成しの祈りをする大切な務めがありました。民数記6章の大祭司アロンの有名な祈りは、神様が私たちに御顔を向けて、平安と祝福と恵みをくださるようにと祈りです。そのように、神様の祝福を全て私たちに与えるために、イエス様は十字架で命を捨て、復活されました。

祝福をしたままで

イエス様が地上から天に昇られるとき、始めは顔を向けておられたのに、急に後ろを向き、途中から手を下げて行ったら、弟子たちは何と寂しい思いをしたことでしょう。しかし、イエス様は弟子たちにその輝く御顔を向け続けたまま、天に昇られました。それは、目には見えなくても、いつも一緒にいるよ、また迎えに来るからね、約束を信じて待っているんだよというメッセージです。イエス様が祝福した姿のままで天に帰られた様

子を見て、感動した弟子たちは大喜びでエルサレムに帰りました。イエス様が祝福してくださることを信じ、弟子たちは心から喜んで神様を賛美し続けました。そして彼らは一緒に集まり、イエス様のお言葉に従って、約束の聖霊が与えられることを信じて、祈り待ち望んだのです。

天のイエス様

それでは、今イエス様はどのようにしておられるのでしょうか。実は、イエス様は天に帰られた日から今日まで、この二千年の間ずっと私たち人間を祝福し続け、父なる神様の前で執り成してくださっているのです。イエス様は、昨日も今日もいつまでも変わらないお方です。ですから今日も、私たちがイエス様を信じて、神様の道を歩き続けることができるように、聖霊によって導いてくださっています。十字架によって私たちの罪を赦し、神様の子どもにふさわしく生きていくことができるように、守っていてくださるのです。

まとめ

イエス様が弟子たちの目から見えなくなること、寂しいことのように思いましたが、その後には、聖霊が来られる約束が残されました。そして今、神様はすでに聖霊を注いでくださっています。心の寂しいお友だち、悲しんでいるお友だちはいませんか。イエス様は味方です。

私たちは、聖霊をいただいて、イエス様がもう一度来られる約束の日まで、イエス様を賛美しながら、お友だちにも、家族にも、イエス様のことを伝え続けましょう。

♪まもなくこの世に♪

(教会学校せいか55)



聖書 サムエル上1・1～20 テーマ 信仰の母

序論

今日は母の日である。聖書には敬虔な信仰を持つ母が数々登場するが、今回はハンナについて学びたい。ハンナは自らの祈りをもつて、私たちに神に求めることの大切さを教えるのである。

(加藤)

一、ハンナの悲しみ

ハンナはエルカナの妻であるが、エルカナにはもう一人の妻ペニンナがいた。ハンナには子どもがなかったが、ペニンナには子どもがあった。子どもを持たないハンナは、家族の中で辛く悲しい思いをしなければならなかった。ここではハンナの悲しみについて二つのことが記されている。一つはシロに上って犠牲を献げる際のエピソードである。ペニンナとその子どもたちには分け前が与えられた。しかしハンナには一人分の分け前しか与えられなかった(1・4、5)。

もう一つはペニンナとのやり取りである。夫エルカナはハンナを愛していたので、ペニンナはハンナを憎んだようである。彼女はひどくハンナを悩ました。ペニンナはハンナに子がないことをなじったようであった。そしてハンナに「主がその胎を閉ざされたことを恨ませようとした」。宮に上ることにペニンナはハンナを悩ませたので、ハンナは泣いて一人分の分け前を食べることもしなかった。エルカナの慰めも悲しみにくれるハンナの

心には届かなかった(1・6～8)。

二、ハンナの祈り

シロで家族が飲み食いした後、ハンナは一人立ち上がり、神殿に行き、「心に深く悲しみ、主に祈って、はげしく泣いた」(1・10)。

祈りの中でハンナの長年の悩み、憂い、苦しみ、どこへも持って行き場のない悲しみが堰を切ったように涙をもつて溢れ出たが、そのような感情が主の前に持ち出されることは、決して悪いことではない。人がどうしようもなく行き詰った時、聖霊はこのような真実の祈りに導いてくださるのである。

ハンナはこの涙の祈りの中から信仰の決心をする。それは主の御前での誓願である。ハンナはこのまま苦しみと悩みの中に留まるよりも、「万軍の主」に望みを賭けた。「万軍の主よ、まことに、はしための悩みをかえりみ、わたしを覚え、はしためを忘れずに、はしために男の子を賜わりますなら、わたしはその子を一生のあいだ主にささげ、かみそりをその頭にあてません」(1・11)。

これがハンナの誓いであるが、決して浅はかな取引と言ったものではない。切迫した祈りは、その人の内に具体的な形をもつて主に応答する決心を引き出すものである。

三、祭司の祝福

ハンナの祈りは長く続いた。神殿の柱のかたわらにいた祭司エリは、ハンナが酔っているかと思ひ込んで彼女をとがめるが、ハンナはエリに申し開

きをする(1・12～17)。事の次第を知ったエリは祭司としてハンナのために主の祝福の祈りを献げた。「安心して行きなさい。どうかイスラエルの神があなたの求める願いを聞きとどけられるように」(1・17)。

祭司の公の奉仕は人々のために主に犠牲を献げることであったが、祭司はそれによって彼らから報酬を得た。そして祭司はその報酬を与えた相手のために適切な祝福の祈りを献げたのである。この時、祭司エリはハンナから何か報酬を受け取ったわけではなかったが、ハンナの信仰の祈りに答えて祝福を祈った(ウオルトン『バイブルバックグラウンドコメンタリー』33頁「英文」参照)。

四、ハンナの勝利

祈りから帰ったハンナの顔は、もはや以前のようではなかった(1・18、新改訳)。口語訳では「その顔は、もはや悲しげではなくなった」と、より積極的に描かれる。ハンナは自らの祈りのゆえに、そして祭司の祝福によって信仰の確信と勝利が与えられ、悲しみと憂いから解放されたのである。このようにして神様の深いご計画の内にハンナの祈りによって、イスラエルの預言者サムエルが誕生した(1・19、20)。

結論

私たちは偉大な預言サムエルの誕生の背後にある信仰の母ハンナの涙の祈りを知る。私たちも、私たちのために献げられる尊い母の祈りを深く覚え、心からの感謝をしよう。

研究資料

(木村)

「そのころ、イスラエルには王がなかったたので、おの自分の目に正しいと見るところをおこなった」(士師21・25)という霊的最暗黒の士師の時代から、王によって統治される時代に移行する重大な転機を記したのがサムエル記である。この時、イスラエルを正しく導くために神に立てられた人物がサムエルであり、そのサムエルを生んだ母がハンナである。

テキスト

152 エルカナ エフライムに住むレビ人であった(歴代上6・22〜38)。ふたりの妻があつてエルカナの妻「ハンナには子どもがなかった」。後継ぎとなる子どもがいなければ、先祖からの相続地を失うことになるので、エルカナは相続地を失わないために、ペニンナを二人目の妻として迎え、後継ぎを得ようとしたのであろう。ペニンナはエルカナの期待どおり子どもを次々と産んだが、一夫一婦制(創世記2・24)が崩れた家庭には同時に問題も生じてきた。

358 年ごとに イスラエルの男子は年に3度、過越の祭り、刈入の祭り、^{かりい}飯庵の祭りのたびに巡礼した(出エジプト34・18〜24)。万軍の主 聖書中、ここで初めて登場し、以後しばしば用いられる神の称号。主が全宇宙の王、主権者であることを表明する呼びかけ。分け前を与えた 主に犠牲の動物を献げた後、残りの肉を家族やレビ人と一緒に喜びながら食べる酬恩祭^{しゅうおんさい}であろう(レビ7・11〜21)。子どものいるペニンナの皿には多くの分け前

が盛り付けられたが、ハンナには一人分のみであった。その上ペニンナは、「ひどく彼女を悩まして、主がその胎を閉ざされたことを恨ませようとした」。十人の子ともよりもまざっている 当時の慣用句で(ルツ4・15)。「十」は7と同じく完全数。ハンナにとつてエルカナは「十人の子ともよりもまざっている」と、親密な夫婦愛をもつていくら慰めても、毎年^{毎年}の巡礼は、ハンナに不妊であることを嫌というほど思い知らせる残酷なものであった。年は暮れ、年は明けた ハンナの涙の日々は、来る年も来る年も続いた。

9516 ある年の巡礼祭で精神的悲痛が最高潮に達したハンナは主の宮で祈った。聖書中、最初に記録されている女性の祈りであり、かつ無言の祈りである。主に祈って、はげしく泣いた ハンナは人目もはばからず、泣いているのか祈っているのかわからないような激しい祈りを主にささげた。「彼女の目から涙が出たように、祈りが彼女の心から出た」(マシュー・ヘンリー)。その子を一生のあいだ主にささげ もし男の子が与えられたら、ナジル人(一生涯もしくは一時期、神に献身する誓いを立てた人のことで、男の力と栄えの象徴である髪にかみそりを当てないのはナジル人としての献身と聖別のしるし。民数記6・1〜5)として主に献げる誓願をした。そして誓願どおり、サムエルを主に献げた(1・25〜28)。声は聞えなかった 古代社会では、ほとんどいつも声を出して祈っていたが(詩篇3・4、4・1他)、この時のハンナの祈りは無言の祈りであった。酔っ払いのふりだと思つて 口を動かすだけで声が聞こえないハンナの祈りは、エリには酔っ払いのように見えた。第7月(太陽暦の9〜10月)に行われ

る飯庵の祭りはぶどうの収穫時期でもあり、ぶどう酒に酔う巡礼者も珍しくなかったであろう。しかし同時にこれは、当時の人々が宗教的に墮落していたことを暗示している。心を注ぎ出して 自分の苦しみ、悩みを、主の前にすべて注ぎ出すのが祈りである(詩篇42・4、62・8、哀歌2・19他)。

17518 その顔は、もはや悲しげではなくなった「安心して行きなさい」というエリの言葉を聞き、遂に祈りによる勝利の確信を得たハンナは、客観的な状況はまだ少しも変わっていないが、その心が変わり、それによつて顔つきも変わった。

19520 知り 性行為の婉曲表現。サムエル「主に求め」て与えられたので、サムエル(神の名、の意)と名づけた。ハンナの祈りは、サムエルが与えられて終わりではなかった。サムエルが乳離れするまで祈りによつて養育し、祭司エリに預けた後も、毎年上着を作つてサムエルを訪ねる際、体の成長だけでなく、魂の成長にも心を配つて祈り続けたことであろう(2・18〜19)。そしてサムエルもまた、「わたしは、あなたがたのために祈ることをやめて主に罪を犯すことは、けつしてしないであらう」(12・23)と言つように祈りの人であった。イスラエルを霊的最暗黒時代から救つた神の人サムエルを育てた最大のもの、実に母ハンナの祈りであったと言つても過言ではない。

参考図書 榊原康夫「サムエル記」『新聖書注解旧約2』(いのちのことば社)、千代崎秀雄『乱世の指導者』(いのちのことば社)、Youngblood,R.F.,「1,2Samuel」The Expositor's Bible Commentary, Vol.1.8(Zondervan)他

聖書	サムエル上1・1～20
タイトル	信仰の母ハンナ（母の日）
暗唱聖句	ハンナは心に深く悲しみ、主に祈って、はげしく泣いた。
目 標	祈りの母ハンナの信仰に教えられる。
	サムエル上1・10

導入

（光田）

今日は母の日です。アメリカの教会学校の先生をしていたジャービス夫人の追悼記念会に、娘のアンナさんが、カーネーションの花束を飾って、母への感謝を表したことから始まっています（二〇〇三年度第I巻58頁参照）。

皆さんの中にはもうお母さんがいない人もいるかもしれませんが、でも、これから大人になってお母さん、お父さんになるとき、聖書のよいお手本を知っておくことは大切なことです。今日は、信仰深いお母さんの一人、お祈りをして神様から赤ちゃんをいただいた、ハンナのお話です。

ハンナの悲しみ

エブライムの山地にエルカナという人がいました。ペニンナという奥さんとの間には子どもが何人かいましたが、ハンナとの間には子どもがありませんでした。この当時は、子どもがたくさん与えられることが祝福でしたので、ハンナはとても悲しい思いをしていました。その上、ペニンナは子どもがないハンナをひどくいじめたので、ハンナは涙を流すことが何度もあったのです。

その頃、家族皆で、毎年シロにある神殿に行き、神様に犠牲をささげていました。いつものようにシロに出かけ、そこで食事をするのですが、ペニンナと子どもたちは人数が多いので、たくさんのお食事が出されました。けれどもハンナは子どもがないので、ただ一人分だけです。ハンナはとても悲しくなっていました。これを見ていたエルカナはそばに来て「ハンナ、あなたは私にとっては10人の子どもにまさる大切な人だよ」と優しい言葉で慰めました。けれどもハンナはそれだけでは、満足できませんでした。

ハンナの祈り

ハンナは早速神殿に行って、神様に心を注ぎ出し、涙を流してお祈りをしました。「もし神様が私に子どもを授けてくださるなら、私はその子どもを神様の御用のためにおささげいたします。どうぞ私の願いを聞いてください」。そのお祈りは長く続きました。この様子を柱のそばから見ていた祭司エリは、ハンナが酒に酔払っているのだろうと思いい、「酔っていないで起きなさい」と声をかけました。するとハンナは「いいえ、私は不幸な女です。私はお酒に酔っているではありません。ただ神様に心を注ぎ出して祈っていただけです。私を悪い女だと思わないでください。長い間積み重なっている心の重荷と悲しみを、神様に訴えているのです」と答えました。

祭司エリは、ハンナが本気で神様にお祈りしている人だということが分かり、「安心して行きなさい。神様が祈りに答えてくださいますように」と祝

福しました。そこでハンナは「どうか、私に恵みを受けさせてください」と言ってその場所を離れました。ハンナの顔は、もう見違えるほど明るくなっていました。エリの言葉を聞いて、神様が祈りに答えてくださると信じたからです。

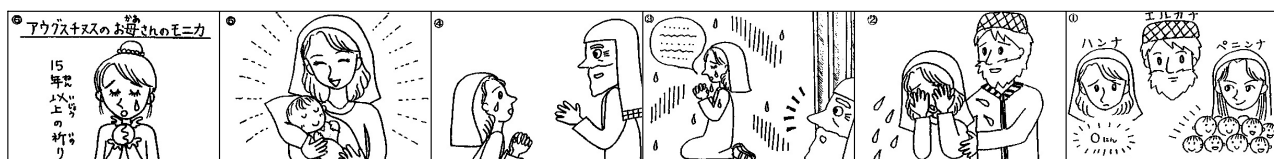
ハンナの喜び

エルカナ一家は、朝早く起きて神様を礼拝して、ラマの家に帰りました。神様は、エルカナとハンナに約束どおり赤ちゃんを授けられました。そして、その赤ん坊をサムエルと名づけました。この名前は「神様の名」という意味です。サムエルは、ハンナが神様のお名前を呼んで、祈って生まれた子どもだからです。ハンナも神様に約束をしたとおり、乳離れしたサムエルを神様の御用のためにおささげしました。祈りによって生まれたサムエルは、それからのイスラエルの国にとって、とても大切な預言者となりました。そして、神様の前に祈り続ける人となったのです。

例話・まとめ

アウグスチヌスのお母さんモニカは、神様に背いた生活をしていた息子の子のため、15年以上も祈り続けました。アウグスチヌスは、この母の祈りによって鮮やかな回心を経験しました。そして後に、神学者として神様に役立つ立派な人物になったことは、よく知られています。祈る母ハンナが、祈るサムエルを育てました。祈る人は祈る人を育てます。私たちも祈りの人ハンナのように、神様に用いられる祈りの人になりたいですね。♪祈ってごらんよ♪

（新聖歌頌）



聖書 Ⅰコリント

2・14～3・3

テーマ 御霊を求めて

序論

(加藤)

私たちが正しい教会形成を心がけるために何が大切な？このことはいつの時代でも問われるべき問題である。パウロはコリントの教会との具体的なかわりの中で、この問題について真正面から取り組んだ。

一つにはコリントの教会には深刻な分争があった。教会員は互いに分派を作って争っていた。その中には自ら知恵を持つ者であると自称し、高ぶって他を見下す者さえあった。

このような分争の真の原因は何か？パウロはこのことが霊的な問題であることを看破した。教会が教会として正しく一致し、宣教のわざをするためには、何よりも一人一人が御霊に自らを明け渡した霊の人とならなければならない。

一、生まれながらの人

パウロは霊的な観点から、人を三つのタイプに区別した。その一つは「生れながらの人」である。生まれながらの人とは、まだ救われて新しく生まれ変わっていない、聖霊を受けていない人(Ⅱコリント5・17)である。

この生まれながらの人は「神の御霊の賜物を受け入れない」。「神の御霊の賜物」とは「神の御霊に属すること」(新改訳)である。しかし御霊を内に持たない生まれながらの人は、御霊に属すること

は無関係であり、彼らにとって御霊の賜物は何の価値もない(愚かな)ものでしかない。また彼らは御霊の賜物のことを(理解することが出来ない)。何故なら、御霊に関することは、この世の知恵によつては理解することが出来ず(2・11～13)、御霊ご自身によつてでなければ(判断)することが出来ないものだからである。人は御霊を内にいただけではない限りは、御霊の賜物を知ることにはできない。

二、霊の人

二番目の「霊の人は、すべてのものを判断するが、自分自身はだれからも判断されることはない」。霊の人は他の訳では「御霊を受けている人」(新改訳)のこと。御霊を内にいただいた霊の人が御霊に属するすべてのことについて判断をする際にはこの世の知恵を持ち込む必要はない。内にいます御霊御自身が判断をしてくださるからである。

ここでパウロは、イザヤ40・13(70人訳)を用することによつて、生まれながらの人は決して神の思いを知りえないということを、もう一度はつきりと指し示す。「(だれが主の思いを知つて、彼を教えることができるか)」。

しかし、次に御霊についての確信ある言葉が述べられる。「(しかし、わたしたちはキリストの思いを持つている)」。パウロは御霊を受けている霊の人、即ちパウロを含む「わたしたち(強調的用法)」こそが「キリストの思い」を持つ者であることを強調する。霊の人はキリストの思いを知るだけでなく内に持つのである。そしてキリストの思いを持つ者は、霊に属するすべてのことを判断するのである。

三、肉に属する者

三番目の「肉に属する者」は「キリストにある幼な子」とあるように、せっかく御霊をいただいているのに、霊の人にふさわしく成長していない人のことである。

具体的には、自分の知恵を誇り分派を起こすコリントの教会のある人々を指す(3・4、5)。彼らは「肉の人」であり、パウロの与える霊的な食物を消化する力がなかった。幼いままの霊的狀態に留まっていたので、教会の中で「ねたみや争い」に明け暮れ、この世の「普通の人間」のように振る舞い、教会を乱した。

聖霊を受けるということは、教会にかかわることから離れた個人的な体験として考えられるべきではない。教会の一切の働きは御霊によつてなされているからである。ゆえに御霊に属する霊の人は教会の徳を高め、教会の一致と成長をもたらすことのために有益な者となるはずである。人が教会においてどのように生きているか。それがその人が霊の人であるか、それとも肉に属する者であるかの判断の大切な基準となる。

結論

私たちは主の前に何をするかを問う前に、何であるかを問わなければならない。あなたは今、肉に属する幼い子どもだろうか。それとも霊の人たる成人だろうか。今、私たちは霊の人たるべく切に御霊を求めようではないか。キリストの思いを内にいただいて、謙遜と柔和をもって教会の建設のために労する者となろうではないか。

研究資料

(足立)

2・6・16でパウロは、救いに関して全てのキリスト信仰者は賢明であると語りかけている。彼らは、神がご自分の民に啓示された神の隠された知恵を受け入れた。事実これらの人々は聖霊によって導かれている。結論部分となる2・14・16には、霊的でない人と霊的な人が記されている。パウロはまず消極面から始め、霊的でない人が出来ないことを伝えている(14)。続いて彼は積極的に霊的な人について語り(15)、そして、最後に「キリストの思い」を持つ彼と、この手紙の読者に言及している(16)。

テキスト

14 生まれながらの人 ここでパウロは霊的でない人と、霊的な人を対比させている。それはこの世に属する人と神に属する霊的な人である。またそれは未信者とキリスト信仰者である。そして一方は御霊を持たず、もう一方は御霊を持つ。つまり一方は生まれながらの本能に従い(ユダ19)、もう一方は主に従う。生まれながらの人は神の御霊の事柄を退ける。なぜなら、その人は御霊の導きを理解できず、それを求めない。彼は世の事柄だけをを受け入れる。**それは彼には愚かなもの**。霊的な事柄は、罪、自責、赦し、贖罪、救い、正義、そして永遠のいのちに関連する。生まれながらの人にとってこれらのことは意味が無く関連せず、愚かでさえある(参照1・18、21、23)。これらは現世に限られたいのちにあつては立場を持たない。御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれ

を理解することができない 未信者のいのちには聖霊が不在という理由で、パウロは無力を説いている。仮に未信者が知性、教育、哲学、倫理性等、様々な分野でキリスト信仰者よりまさっている。その人には自分の理解力に光を与える聖霊の内住が欠落している。「判断される」(アナクリノ)という動詞は重要(本書で10回使用、2・14、15「2回」、4・3「2回」、4、9・3、10・25、27、14・24、他のパウロ書簡には出てこない)。先ず、私たちが生きる上で霊的な文脈を見定める絶え間のない過程を意味する。次に受動態は以下のことを意味する。すなわち聖霊に導かれる信仰者は、諸々の霊が神からのものかどうか確認するために、試すことが出来る(参照1ヨハネ4・1)。神への服従こそ、キリスト信仰者があらゆる事柄を霊的に判断する視点。無神論者は彼自身が罪と咎の中に死んでいるので、霊的に判断することが不可能(エペソ2・1)。御霊の力が人の生活に入り、その人を霊的に照らさなければ、彼は霊的な闇に留まっている。

15 霊の人は、すべてのものを判断する 知恵の源である神ご自身のもとに直接行くキリスト信仰者は喜ばしい(ヤコブ1・5)。その人は神から限りなく知恵を受け取る。従ってその人はすべての事柄を思慮深く吟味し、闇が覆う罪の世にあつて指導力を発揮できる。信仰者にとって聖書こそ、自分の小道の光であり、足下の灯火である(詩篇119・105)。その人は神の光にあつて光を見ることを知っている(詩篇36・9)。キリスト信仰者には聖霊の油注ぎがある故に、真理の知識を持っている(I

ヨハネ2・20)。その人は真理と間違い、事実と作り話、信憑性と偽装を識別することが出来る。「すべてのもの」と言う表現は、人間存在に関わる幅広い範囲を意味する。これは、一人のキリスト信仰者が人生のあらゆる分野に精通していることを意味しない。むしろ、神が置かれた共同体を考慮して、その人はすべての事柄を霊的に知ることが可能になる。**自分自身はだれからも判断されることはない** これはパウロの大胆な発言である。しかしながら彼は、キリスト信仰者は決してさばかれないと言うのではなく、むしろ未信者によってさばかれることがないと主張している。信仰者は神の言葉の基盤でさばかれる。

16 だれが主の思いを知って、彼を教えることができるか パウロはいザヤ40・13の引用を示すことで不可能を示している。彼は既に神の事柄を知る不可能性に言及してきた(2・11)。そこで彼の関心は、聖霊が神を深く知らせてくださる事を示すことにあつた。神と深く交わることは生まれながらの人間には不可能なことである。この不可能なことを可能にしてくださるのが聖霊なる神で、罪人に聖なるお方を共有させてくださる(IIペテロ1・4)。それ故パウロは、**わたしたちはキリストの思いを持っている** と断言することが出来る。彼はすべてのキリスト者がキリストの思いをみな理解していると言っているのではない。彼が意味するのは、内住の御霊がキリストを明らかにすること。参考図書 Kistemaker, S.J., I Corinthians (Baker), Morris, L.J. I Corinthians (IVP).

聖書 Iコリント2・14～3・3
 タイトル 聖霊を求めて
 暗唱聖句 わたしたちはキリストの思いを持っている Iコリント2・16
 目標 霊の人とされて生きよう。

導入

(光田)

皆さんは教会に誕生日があるのを知っていますか。来週は、教会が誕生した記念日、ペンテコステ礼拝です。イエス様が天に帰られると、代わりに聖霊なる神様が来られました。祈って待っていた人たちの心に聖霊が注がれ、教会が誕生したのです。教会とは、建物のことだけを指しているわけではありません。イースターの前には受難週があり、クリスマスの前にはアドベントで心の準備をしたように、ペンテコステの礼拝を迎えるために、私たちの心を備えることにしましょう。

生まれながらの人

教会には、お年寄りの人もいれば、赤ちゃんもいます。男の子や女の子、日本人、アメリカ人、韓国人、いろいろな国の人たちが集まって来ます。子ども聖書日課にも書かれていましたが、その中には、誕生日が一つの人と、二つある人がいます。一つ目は、お母さんお腹の中から生まれた、誰にもある誕生日です。この誕生日のない人は一人もいません。でも、もう一つの誕生日は、ある人となない人がいます。年に二回も誕生日があるなんて、うらやましいと思っている人がいるかな。この二度目の誕生日は、身体が生まれた日ではなく

で、心が新しく生まれ変わって、神様の子どもとなった日のことです。

自分の罪が分かって、神様にお詫びをし、イエス様が十字架で私の罪の身代わりに死んでくださったことを信じた日、それが二つ目の誕生日です。身体は誕生日だけしか知らない人も、二度目の誕生日をもつことができます。聖霊は、私たちを罪から救い、神の子どもとするために、今も働いておられるのです。そのように、イエス様を信じて神の子どもとされるために、私たちは教会に呼び集められています。

肉の人

肉の人って聞いたことがあるでしょうか。太っている人のことではありません。イエス様を信じていても、聖霊に満たされていないので、すぐにムカついたり、キレたり、喧嘩をしたり、悪口を止められなかったりする人のことです。肉の人は、神様を知らないわけではないのですが、神様中心ではなく自己中心な人です。わがまま、えこひいき、告げ口、憎しみ、ねたみ、いじめ、自慢、ごめんなさいと言わない、などなど。これだけ並べれば、皆さんにはどんなことを言っているか、もう分かるでしょう。肉の人は、イエス様の心を持っていません。だから聖霊に満たされないで生きるなら、大人も子どもも仲良くできないのです。

霊の人

これと全く反対なのが、霊の人です。霊の人は聖霊に満たされているので、イエス様と同じ愛の心を持っています。赦す心、人を思いやる心があります。自分から仲間になろうとしたり、人を励

ましたいと願う心にされます。イエス様を心の中にお迎えしているので、恐れはありません。どんなことが起こっても喜ぶ方法を知っているし、何があっても感謝することができるようになります。そして、イエス様のことを伝えたいという願いが起こされるのです。

キリストの思い

イエス様は少しも悪くないのに、私たちのような醜い心の者の身代わりになって、十字架で死んでくださいました。罪が分らないで滅んで行く私たちを見過ごしにされないで、自分の方から走り寄って助けてくださるのが、イエス様の心です。自分が傷を受けること、痛みを負うことなど計算しないで与える愛です。私たちは、イエス様の心には程遠い者です。また、自分の努力でイエス様のようにすることはできません。

けれども、ペンテコステに降られた聖霊が私たちの心に住まわれるなら、イエス様の心を与えてくださるのです。きよい神様は、汚いままの心にお宿りなさることはできません。罪を悔い改めて、イエス様の血潮によって洗われ、きよくされた心にお住まいになります。

まとめ

まだ二度目の誕生日を迎えていない人は、イエス様を信じましょう。まだ自分は肉の人だな、と思った人は、悔い改めて聖霊を迎えましょう。そして、皆が霊の人にされて、神様の御心を行う人にしていただきましょう。聖霊は、信じて求め、従う人の心に来てくださいます。

(新聖歌57)



(加藤)

一、助け主として（16節）

キリストが去って助け主が地上に遣わされるのは、弟子たち（あるいはすべてのキリスト者）の益になるためである。キリストは「わたしが去って行くことは、あなたがたの益になるのだ。わたしが行くことによって、あなたがたのところに助け主はこないであろう」（16:7）とさえ言っている。この助け主は地上に残された弟子たちがキリス

二、真理の御霊として

御霊に、私たちがイエスこそ神の子キリストであると信じる事が出来るように働いてくださる。実際御霊によらなくては誰（だれ）もイエスを主と告白することは出来ない（Iコリント12・3）。

このように御霊はキリストの福音の真理を証し続けることによって、教会をキリストの体として建て上げ、私たちを父なる神と、子なるキリストとの永遠の愛の交わりの内に入らせる（Ⅰヨハネ 1・1〜4）。

しかし（この世はそれ（真理の御霊）を見ようともせず、知ろうともしないので、それを受けることができない）（14・17）。ここに御霊のかかわ

三、いつまでもあなたと共に

しかも父なる神は御霊を、（いつまでもあなたがたと共におらせて下さる）（14・16）。

御霊がこの世に遣わされるのは終末にかかわる事柄である。御霊は私たちが終わりの御国の実現の時に一つとなる時まで、また全うされた後も、いつまでも私たちと共にいてくださるのである(17:20-26)。

キリストがこの世を去り父のもとに歸るにあたって御霊が助け主として遣わされたのは、キリストの体なる教会を建て上げ、私たちを神との交わりに入らせる主のご計画である。ペンテコステは約束の御霊のご降臨であり、以来御霊は私たちの宣教を助け、世の終わりまで共に働いてくださるのである。この御霊に信頼して、御国の建設のために励んで行こう。

研究資料

(足立)

13章から始まっている最後の晩餐ばんさんの席で、イエスはご自分の弟子たちを孤独にするのではなく、助け主すなわち聖霊なる神が彼らのところに来ると約束された(14・26、15・26、16・7〜5)。助け主の最初の約束がこの段落に登場し、イエスの言明によつて囲まれている。すなわちイエスの命令を守る者は、イエスを愛する者である(14・15、21)。

テキスト

15 もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである イエスは言葉によつて助け主の約束を語り始めた。イエスを愛することは情緒的なことではなく、彼の命令を守ることにより現される。つまりイエスが教えたすべてのことに、信仰と服従をもつて応答すること。彼は愛の継続する姿勢について語っている。また他の多くの個所でイエスの教えは、受け入れ、従うべき言葉として述べられている(ヨハネ8・31、51〜52、12・48、14・23〜24、15・20、17・6)。

16〜17 わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。それは真理の御霊である イエスを愛し従う者たちに彼は約束された。助け主と訳されていることば(パラクレートス)は、ここで初めて本福音書に登場している。パラクレートスは本福音書で4回(14・16、26、15・26、16・7)、1ヨハネで1回見いだされる(1

ヨハネ2・1)が、他の新約文書のどこにも出てこない。本福音書でパラクレートスは、イエスが父なる神の元に帰った後で、弟子たちに送られる聖霊を一貫して意味している。1ヨハネでパラクレートスは、信仰者の弁護者としてのイエスご自身を意味する。

古代ギリシャ文書においてパラクレートスは、告発された人のために語る弁護者を一貫して意味する。本福音書でパラクレートスの機能の一つは、神に敵対するこの世に対してイエスを支持して証言することにある(16・7〜11)。

しかしながらパラクレートスの意味が、古代ギリシャの様式のみの規定されるわけではない。本福音書では、様々な文脈でこの言葉が使われている。イエスの旅立ち後に弟子たちを慰める(14・16〜17)。弟子たちを教える(14・26)。イエスのために証言する(15・26)。罪と義とさばきをこの世に悟らせる(16・7〜11)。弟子たちをすべての真理に導き、彼らに起こるべき事柄を告げる(16・13)。以上から理解できるように、パラクレートスは「慰め主」、「教師」、「弁護者」、「カウンセラー」、「助け手」、「導き手」、と幅広く翻訳され得る。

そこで16〜17節に戻ると、パラクレートスに対するイエスの約束に関して幾つかのことに注目する必要がある。

第一に助け主をおくることは、御子を愛し従う者に御父によつてなされる。これは私たちの愛や従順がこのおくりものに値するという意味では決してない。むしろ御父が助け主をおくる御子に関係する人々と言うこと。助け主をおくっていた

く人間側としての鍵は、イエスへの従順に注目することが重要でもある。しかし繰り返しになるが、非凡な信仰者が成し得るかなり霊的な従順と言うことでは決してない。従順が意味する内容は、イエスに信頼すると言うことで、彼に従う委託である。イエスの最初の弟子たちは、熱心な信仰と従順により御霊のおくりものに値した立派な人間ではなかった。彼らはことを理解していなかった。彼らはあまりにも人間的で、神の思いを知らなかった。しかし、そのような不完全な彼らではあったが、この世が主を否定するのとは違い、主への信仰と従順はいくらも持っていた。このような弟子たちにイエスは助け主の約束をされた。

第二に、助け主のおくりものは、主の要求により御父より弟子たちになされる(7・37〜39)。

第三に、弟子たちを孤児としないために別の助け主をおくると言った主の約束は、彼の旅立ちの文脈であつた(14・18)。助け主が来ることはイエスの肉体の存在に置き換えられたことを暗示。

第四に、助け主は弟子たちと永遠に共にいると、イエスは約束された。御霊は、例外なく全てのキリスト信仰者に与えられている。

第五に、助け主は、真理の御霊と述べられている(14・17、15・26、16・13)。この点から助け主はイエスのように真理を明らかにする(8・31〜36、40、45〜46、16・7、18・37)。そして神の真理を受肉させた(1・14、17)。

参考図書

Kruse, C.G., John Morris, L., The Gospel According To John (Eerdmans) .

聖書

ヨハネ14・15・17

タイトル

助け主（ペンテコステ）

暗唱聖句

父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであらう。

目 標

父なる神が約束された助け主を信じる。

ヨハネ14・16

導入

（光田）

ペンテコステ記念日、おめでとうございます。皆さんは、教会の三大祭りを知っていますか。クリスマス、イースター、そして、ペンテコステです。イエス様が復活されて50日目に、約束の聖霊がこの世に来てくださったって、教会が生まれた日です。目には見えませんが、聖霊とか御霊と呼ばれる助け主なる神様が、私たちのところに来てくださったことを記念する日です。今日は、聖霊が来てくださった意味を学びましょう。

神を愛する

皆さんは、イエス様が何をするためにお生まれくださったかを知っているでしょうか。イエス様が来られた目的は、私たちの罪の身代わり十字架にかかる、死と悪魔を滅ぼして三日目によみがえられるためです。そして、イエス様が天にお歸りになるなら、私たちのところに聖霊なる神様が遣わされ、私たちを助け、励まし、慰め、救いの道に導いてくださるのです。

聖霊は、私たちに罪がどういふことか、天のお

父様がどんなに私たちを愛して下さっているか、イエス様の十字架の恵みがどんなに偉大な愛なのかを悟らせてくださいます。もし、イエス様の十字架と復活がなかったら、聖霊はおいでになることはできませんでした。聖霊が来られなかったなら、私たちは自分の罪をもったまま永遠の滅びに行きしかなかったのです。イエス様は、「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである」と言われました。イエス様が戒めと言われたことは、神様を愛することです。聖霊は、私たちが神様の愛の中に生き続けられるように働いてくださるのです。

共におられる神様

もし自分一人が、どこかに置き去りにされたら寂しいですね。しかし、イエス様は、私たちを孤児のように一人ぼっちにしておかないよ、と約束されました。イエス様が今でもイスラエルにおられたとしたら、私たちはイスラエルにまで行かなければお目にかかることはできません。けれども、今は目には見えませんが、聖霊なる神様が来られたので、いつでも、どこに行っても、私たちは神様と一緒にいることができるのです。

真理の御霊

私たちは学校でたくさん勉強をします。光の速さ、重力の法則など、いろいろな真理を学びます。けれども、神様が教えてくださる真理は、そのような頭の中に記憶する内容ではありません。聖霊が教えてくださる真理は、私たちが罪と滅びから救い出す真理です。真理の御霊は、神様が憎まれる罪が何であるかをはっきり分からせて、罪を

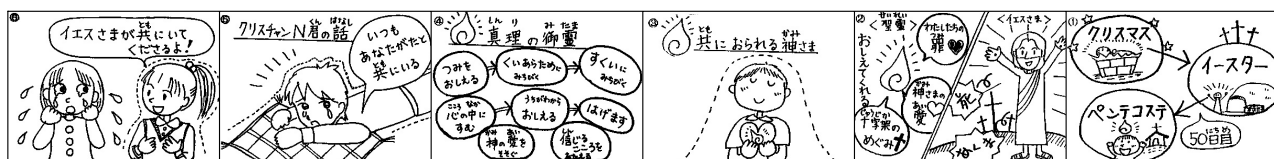
心から悲しむことができるようにして下さり、私たちが悔い改めに導かれます。そして、イエス様の十字架が私の罪のためだということを教えて、イエス様を喜んで信じる者にしてください。しかも、聖霊はそばにおられるだけでなく、信じる人の心の中に住んで、内側から教え、励ましてくださるのです。そして、私たちから離れないよ、と約束してくださるのです。イエス様を信じるなら、聖霊によって、神様の愛が心に注がれ、どんなときでも私たちのハートが温められ、信仰が与えられるのです。

例話

クリスチャンのN君は18歳の春大学に入学。生まれて初めて家族と別れて暮らすことになりました。引越した部屋に一人きりになったとき、今まで知らなかった寂しさに襲われ、彼は思わず座布団にうつ伏せになって泣き出してしまいました。ところが、しばらくそうしていると「いつもあなたがたと共にいる」という声が心の中に響いてきたのです。はっとした彼は、僕には神様が一緒にいてくださると分かり、涙は止まりました。そして、自分と同じように寂しい気持ちの人に、イエス様のことを教えてあげたいと思ったそうです。

まとめ

皆さんの中には、お友だちや両親がいても寂しい人がいますか。聖霊なる神様は、私たちが神様を愛するなら、私たちといつも一緒にいてくださいます。誰か寂しいお友だちがいたら、一緒にいてくださるイエス様のことをお伝えしましょう。♪主イエスと共に♪（福音子どもさんびか90）



聖書 ガラテヤ5・16～26

テーマ 御霊の実

序論

(加藤)

パウロはガラテヤ教会で問題を抱えていた。パウロと違った福音を宣べ伝える者がいたのである(1・5)。彼らは、パウロの宣べ伝えた十字架の福音だけでは十分ではなく、律法を守るべきことを主張した。これに対して、パウロは、徹頭徹尾人はキリストを信じる信仰によって義とされるのであり、行いによる義(救い)を否定した(2・16)。これは当時のガラテヤ教会が直面していた問題を表わしている。すなわち信仰を与えられ教会につながったクリスチャンが、何を生活の規範として歩んでいけばいいのかという問題である。そして、それは今の教会にも通じる問題である。

一、御霊によって歩きなさい

これに対してパウロはホーリネス(聖潔)の観点からキリスト者の道を示す。キリストを信じた私たちは、「アバ、父よ」と呼ぶ御子の霊(聖霊)をいただいたのであり(4・6)、信仰によって新しい神との関係(信仰による義)を開いていただいているのである。

そうであるならば、私たちは御霊に明け渡して、御霊に従って歩くべきである(5・16)。キリスト者として生きる新しい規範は、外から与えられる律法ではなく、内に生きておられる御霊である。御霊によって歩む限り、教会につながるキリスト者が、肉の欲望を満たし神との関係(義)を損

なうことはない。御霊と肉は相反するからである(5・17)。もし、私たちが御霊に導かれるならば、私たちはもはや律法のもとに監視され養育される必要はない(3・23、24)。御霊は私たちに自由にするからである。ただしそれは秩序のない自由ではなく、キリスト者として、神との新しい関係(義)に生きる自由である。

二、肉の働きの顛末

パウロはあらためて肉の働きについて述べる。〈肉の働きは明白である〉と、その目録を示すことによって、ガラテヤ教会の一人一人がはたして御霊によって歩いているか否かのチェックを促す。〈肉の働き〉は、御霊によって歩くことを拒む人間の生き方によってもたらされるすべてである。従ってこのリスト以外にもまだ挙げられ得る(5・21)。神との新しい関係をいただきながら、御霊を拒み肉の欲するところを行う者は、〈神の国をつぐことがない〉。私たちはこのことを重く受け止めるべきである。

三、御霊の実の麗しさ

パウロはここで〈肉の働き〉と対照的に、〈御霊の実〉について述べる。御霊の〈実〉は働きとしての結果ではなく、木の性質をもとにして生み出される果実である(ヨハネ15・1～17)。それゆえに〈御霊の実〉は人間の肉の行い、努力、働きによってもたらされるのではなく、神御自身の御性質にあずかることによって得られるかぐわしいキリストの品性である。

また多くの徳目が増えられつつも〈御霊の実〉

は単数として示されている。ゆえに〈愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制〉という徳目は、一つの御霊を源にする結実である。しかし同時に、それはキリストの御品性の豊かさを表わす。

御霊の実が神の御性質にかかわるものであるがゆえに、御霊の実を否定する律法は存在し得ない。また〈キリスト・イエスに属する者〉、即ち聖霊を内にいだいていては、〈自分の肉を、その情と欲と共に十字架につけて処分してしまった〉(不定過去、Culminative Aorist、すでに完了した結論や結果に強調を置く用法)のである。すでに十字架に死んで肉と無関係になった私たちは、律法から解放され御霊によって神の御性質を内にいだいて、麗しい実を結ぶ者とされているのである。

結論

パウロの結論は初めに戻る。〈もしわたしたちが御霊によって生きるのなら、また御霊によって進もうではないか〉。

〈もしわたしたちが御霊によって生きるのなら〉は、接続詞〈もし〉(エイ)と結びつく直説法であり事実を述べている条件句なので、すでに私たちが事実、御霊によって生きている存在であることを表わしている。私たちはすでに御霊によって生きる者として新しい神様との関係をいただき神の御性質に与っているのである。そうであるならば私たちは、御霊によって生きる者としてふさわしくすべてを御霊に明け渡して、御霊の麗しい実を結ぶ者とさせていただきたいものである。

研究資料

(足立)

ガラテヤ人への手紙の前半部分の強調点は、信仰のみによる義認(参照2・16, 17, 20, 21, 3・6, 11, 24, 5・4, 5)と考えられるが、後半部分のそれは、キリストにある自由(参照4・22, 31, 5・1, 13)と判断される。キリストの十字架による救いに与る以前、私たちは律法にのろわれ(3・10)、律法の断罪のもとにあった(3・22, 23)。しかしキリストが私たちをそこから解放してくださった(3・13)。そこで私たちは、以前は罪の奴隷であった(4・3, 8)が、今は神の子どもとされている(4・4, 7)。

ところがパウロは自由について記すと同時に、この自由はたやすく失われ得るものとの注意を付け加えている。自由から束縛に逆戻りする信仰者もいる(5・1)。与えられた自由を、放縱に変えてしまうキリスト者も出てくる(5・13)。そのような信仰者に対して5・13, 15でパウロは、キリストにある真の自由とは、自制、隣人に対する愛の奉仕、神の律法に服従するものとしてあらわれると、強く主張している。

それでは、このような生き方はどのようにして可能なものとなるのか。それは御霊、聖霊によってである。キリスト者のうちに住む聖霊なる神(3・2)だけが、私たち信仰者を真に自由な者として生かしてくださる。パウロがこのテーマを詳述している5・16, 25には、御霊(プニューマ)という言葉が、7回も使われている。聖霊は私たちの肉に反対し、これを征伐して服従させる(5・16, 17)。そして私たちの生活の中に義の実を結ばせることを可能にする

(5・22, 23)。従ってクリスチャンが自由を味わい楽しむのは、聖霊のお働きによる。私たち信仰者は、キリストの十字架の死と復活によって、罪と死と滅びから完全に救われたのであるが、この世にあって信仰者として、神のきよさの中に歩むためには、聖霊による絶えざる助けが必要不可欠となる。

テキスト

22 実(カルボス)という言葉は、単数形である。パウロはここで九つある御霊の実が多くくの信者に均等に分担されると言っているのではないであろう。つまり各信者が、実のどれかを身につけると言うことではない。むしろ彼は一人の信者の中に、聖霊が一連の性質をすべて生み出すことを述べている。しかも実であって「働き」ではない。人が生み出すのではなく、聖霊なる神の果実である。

愛(アガペー)が御霊の実の先頭にある。神は愛である(1ヨハネ4・8)。また最も大いなるものは愛である(1コリント13・13)。これはキリストが私たち罪人の身代わりとして死ぬために遣わされた愛であると同時に、互いの重荷を負う中に見いだされ得る(ガラテヤ6・2)。

喜びは地上の人間的な幸せを意味せず、主にある喜び(ピリピ3・1, 4・4)であり、神が信仰によって与える(ピリピ1・25)と同時に、兄弟姉妹の分かち合いに見いだし得るもの(1テサロニケ5・16, ローマ14・17, 15・13)。

平和はキリストの完全な和解のみわざを通して与えられるもの(コロサイ1・20)であり、兄弟姉妹との関係を築く上でも不可欠のもの(エペソ2・14, 17, 4・3, ローマ14・19)。

寛容は忍耐、あるいは長く苦しむことを意味する。これは対立する立場にある人や、意見を異にする他者に向けられることをも含んでいる。

慈愛は神の恵み深い態度を意味する言葉。神の慈愛が罪人を悔い改めに導く(ローマ2・4, エペソ2・7)。これも他者への親切的な行為に進む。

善意は定義が難しい。基本的な意味は、親切から生じる気前の良さと思われる(ローマ15・14)。

誠実(ピステイス)は信仰を意味する言葉でもある(ガラテヤ2・16, 20, 3・2, 5, 7, 9, 11, 22, 26, 5・5)。ここでは他者との関係における信頼や忠誠を意味すると思われる(5・5, 参照1テモテ1・12, 11テモテ2・2)。

23 柔和とは、神の言葉を受け入れる態度(ヤコブ1・21)であり、また過ちを犯した兄弟を回復させる姿勢であり(ガラテヤ6・1)、そして主の僕が反対する人たちを訓戒する心である(11コリント10・1, 11テモテ2・25)。

自制とは、肉の欲望に対して勝利を得る資質で、それゆえ思いと行動において節操を保つことと密接に関係している。これも他者の益のためである。御霊の実は、人間関係において聖霊が作り出してくださるキリスト信仰者の品性。

参考図書 J・R・W・ストット『ガラテヤ人への手紙講解』(のちのち)ば社・Fee, G. D., God's Empowering Presence (Hendrickson), Fung, R. Y. K., The Epistle To The Galatians (Eerdmans), Morris, L., Galatians (IVP).

聖書

ガラテヤ5・16～26

タイトル

御霊の実

暗唱聖句

御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制であって、これらを否定する律法はない。

目標

ガラテヤ5・22～23
御霊の実を結んで、主の証人として生きる。

導入

(光田)

先週はペンテコステ記念礼拝、教会の誕生日をお祝いしました。その日以来、今日も聖霊は働いておられます。神様が私たちといつも一緒にいてくださるということだけでなく、私たちの心の中に住んでくださるのでしたね。それでは、聖霊に心が満たされるなら、どのような素晴らしい生活を送ることができるかを学びましょう。

神様の子ども

先々週、クリスチャンには誕生日が二回あるというお話をしました。罪を悔い改めて、イエス様を救い主と信じるなら、誰でも救われ神様の子どもにしていただけます。ですから、二度目の誕生日を迎えて、新しい生き方をしている人は、神様の子どもとして育てていただけるのです。

私たちは自分の家族と暮らし、同じ食事を食べ、同じテレビを見、泣いたり笑ったり、同じ経験をしながら生活をしています。同じように神様の子どもたちも、聖書を読み、神様にお祈りをし、礼

拝をし、神様に従いながら育ちます。神様がいつも共にいてくださるのは、私たちが困ったときに助けてくださるためだけではありません。聖霊はいつも一緒にいて、私たちが神様の子どもにふさわしい生活ができるように導いてくださいます。

御霊の実

ヨハネの福音書でイエス様は、天の父なる神様が農夫で、イエス様がぶどうの木であるとお話されました。私たちがイエス様を信じて、しっかりと信仰によってつながっているなら、聖霊が樹液のように私たちの心に流れ込んで、イエス様のようになり成長させてくださいます。私たちはイエス様につながっているなら、甘くておいしいぶどうの実が実るように育つことができるのです。では、御霊が私たちに結ばせる実とは、どんな実でしょう。

最初の実は「愛、喜び、平和」です。これは神様に対して結ぶ実です。悔い改めて、イエス様を救い主として心から信じるなら、永遠の滅びから救われ、神様の怒りを受けることはありません。神様と仲直りができているので、神様を愛し、神様に感謝することができるようになります。御霊の最初の実は、イエス様を信じて救われた人が持つことのできる特別のものです。あなたは、神様を愛し喜び、平和な心をもっているでしょうか。

次の実は「寛容、慈愛、善意」です。これは私たちのお友だちや、家族、兄弟に対して結ぶ実です。イエス様につながっているなら、周囲の人たちとも仲良くすることが出来ます。友だちが約束の時間に遅れて来ても忍耐強く待つことができるようになります。仲間はずれにされている人の友

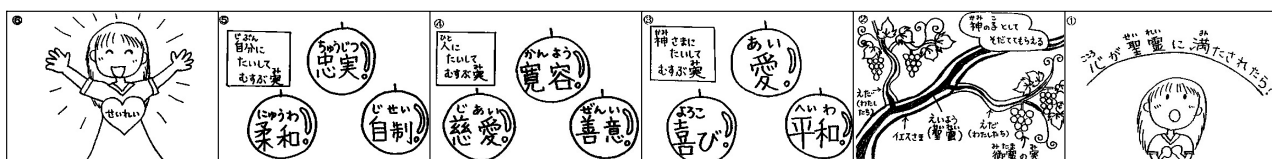
だちになってあげたいと思う優しい心や、弱い人、困っている人を助けたいという心がわきあがってきます。

三つ目の実とは「忠実、柔和、自制」です。御霊は、私自身の生活も変えてくださるのです。学校に遅刻する人、宿題をきちんとしていない人はいませんか。テレビやゲームがなかなか止められない人、おやつを食べ過ぎる人はいませんか。聖霊が心に住んでくださるなら、わがままな心をコントロールできるようになり、私が造り変えられます。そして、自分から進んでルールを守り、自分を調節できるようになります。

例話・まとめ

聖霊は、ヘレン・ケラーのように、障がいがあったとしても、他の人に生きる希望を与えることができる人を造り、マザー・テレサのように、愛をもって貧しい人や弱い人に仕える人を育て、悪いことをしていた人を牧師にまで変えることができる、素晴らしい神様です。

イタリア人のあるお母さんが、子どもたちに手紙を書きました。「あなたたちは神様から大きなものを授かりました。持てる力を余すことなく出し合って、平和の実現のために尽くさない。他人と分かち合い、共有する、開かれた兄弟愛に徹しなさい。近くににいる他人を敬い、生きる自覚を持ちなさい。…人々に希望を与えるために、神から呼びかけられたのです。この手紙以上に、聖霊は、私たちが神の子どもとして、力強い生き方が出来るように内側から励ましてくださるのです。♪主はまことのぶどうの木です♪ (新聖歌32)



聖書 ヨハネ6・1～14 テーマ 小さなさげもの

序論

(加藤)

ヨハネによる福音書の五千人の給食の箇所は、他の福音書と比べて興味深いことが記されている。それはイエス様と弟子たちとの詳細なやり取りと、食物を提供する子どもの登場である。そこにキリストと共にありながら、なお懐疑的な弟子たちと、わずかなばかりの持ち物を献げる子どもとの、あざやかな対比がなされている。

一、人々の必要

エルサレムでのモーセに対する言及(5章)の後、主イエスはガリラヤの海(テベリヤ湖)の向こう岸に渡られた。主イエスの後に大勢の群衆が従っていた。病人たちになされた主イエスのしるしを見たからであった。

しかしこの時、主イエスを追い続けた群衆たちの蓄えは底をついていた。彼らはモーセによって荒野に導かれたイスラエルの民のように、マナを必要としていた(出エジプト16章参照)。

二、弟子たちの懐疑

山に登って弟子たちと一緒に座られた主イエスが目にしたのは、自分の所に集まって来る大勢の群衆であった。そこで主イエスは弟子のピリポに「どこからパンを買ってきて、この人々に食べさせようか」とたずねた。ペツサイダ出身(1・44)で土地に通じたピリポは「二百デナリのパンがあっても、めいめいが少しずついたくにも足りま

すまい」と、現実的かつ常識的に答えた。ここでピリポを試すためになされた主イエスの問いは、これまで何度もキリストのしるしを目にし、キリストの話聞きながらも、なおキリストが真に誰であるかを悟ることがなかった、またキリストに何を求めるべきかが分らなかった弟子たちの悟りの鈍さと、困難な状況に直面した中での弟子たちの懐疑的な傾向をさらけ出す。

弟子たちの懐疑的心情は、さらにアンデレの行を通して反復的に強調される。アンデレは一人の子どもを連れて来て「ここに、大麦のパン五つと、さかな二ひきとを持っている子供がいます。しかし、こんなに大ぜいの人では、それが何になりましょう」と言う。アンデレが子どもを連れて来てこのように発言したのは、この子どもの持つていたわずかな食べ物によって何かが起こることを期待したからではない(F・F・ブルース『ヨハネによる福音書』14頁「英文」参照)。むしろアンデレは旧約の時代の飢饉の時に少ない食べ物をもって百人の人々に給食を命じたエリシャに「どうして、これを百人の前に供えるのですか」と返答した召使と同様に懐疑的であった(列王下4・42～44)。このようにキリストを前にして表わされた弟子たちの懐疑的態度は、持続的に示される。

三、キリストの方法

しかしながらこのような弟子たちの否定的な発言に対して、主イエスは驚くべき方法をもって答えられた。そして、そのために主が用いられたものは、先のアンデレ自身が給食の困難さに言及す

る際に連れてきた子どもの食べ物であった。ここで子どもの持つていた携帯用の粗末な食物は、一転して神の栄光をあらわすさげものとして用いられるのである。

10節の「人々をすわらせなさい」という主イエスの決然としたご命令は、これからなさろうとするご自身の主導的行為を暗示し、行き詰った状況を一変させる起点となる。この言葉の後、主イエスは男だけでも五千人もの群衆の前で、子どものパンを取り感謝して彼らに分け与えた。魚も同様に彼らの望む分だけ分け与えた。しかも人々が十分食べた後も、なお12のかごにいったいなるほどのパンくずが残された。そして主イエスが示したこの圧倒的なみわざ(「しるし」)に群衆は「ほんとうに、この人こそ世にきたるべき預言者である」と言い、主イエスがモーセのような預言者たることを認めて驚くのである(14)。

結論

この所で教えられることは、子どもの献げたパンと魚のわずかさ、群衆を満たしたパンと魚の圧倒的な豊かさとの著しい対照である。この事は献げる事の意味を私たちに問いかける。主イエスがご自身のわざのために用いられたのは、イエス様の問いかけに懐疑的な弟子たちではなく、食べ物すべてをさげた子どもであった。しかもさげられた小さなさげものは、主イエスによってあふれるばかりの祝福の源となったのである。主はどのような小さな者をも、ご自身の栄光のために用いてくださるのである。

研究資料

(足立)

キリストの復活は別として、五千人の給食の出来事は、四福音書すべてに記される唯一の奇跡である。イエスはある少年が弁当として持参していた五つのパンと二匹の魚を、女性や子どもを別として五千人を数える大群衆を養うために用いられ、人々の必要を満たされた(マタイ14・13〜21、マルコ6・35〜44、ルカ9・10〜17)。これは極めてめざましい奇跡であった。不思議な増加はイエスの手の中で成されたものと思われるが、群衆の驚きは計り知れないものであったに違いない。そのみ業は「しるし」と呼ばれる(6・14)。イエスは不十分なものでも、主に献げられた物を用いて、飢えを満たすお方であることを実証した。

テキスト

1 **そののち** とは、不確定な時を示している(参照、3・22、6・1、7・1、19・38、21・1)。「ガリラヤの海が『テベリヤ湖』と呼ばれるようになったのは、紀元20年頃ヘロデ・アンティパスがローマ皇帝ティベリウスにちなんで建てた町テベリヤから由来していると考えられる。

2 **大勢の群衆**(参照6・33〜34)がイエスに付いて来たのは、彼らがイエスに従いたいからではなく、既に2・23〜25にあるように、**病人たちになさっていたしるしを見たから**であった。

3 パンの奇跡が起こる場所は、**山**だと明白にされている。この記述は福音書に幾度か出てくる(例、マタイ5・1、マルコ3・13)。そこはイエスと弟子たちにとつては、よく承知した特別な場所であったか

もしれない。

4 **過越** とあるが、これはヨハネが言及する三度の過越の祭りとして第二回目である(参照2・13、23、11・55以下)。ユダヤ人の過越の祭りは、エジプトからの脱出を祝うものであった。その祝いに固有のものは、各家庭で小羊を殺し、それを食べることであった。本福音書でイエスは神の小羊と宣言されている(1・29、36)。最初の過越の祭りへの言及は、破壊されなければならぬ神殿としてイエスが自らを指定する文脈である(2・13、23)。これは死を意味している。第三の過越への言及は、死の時である(11・55以下)。そしてここでは五千人の給食時である。これはいのちのパンの発見を促し、イエスが世にいのちを与える真のパンとしてご自分を位置づけていることに他ならない(6・33、51)。そして、人々が永遠のいのちを得るためには、そのパン(イエス)を食べなければならぬ。この結びつきは入り組んでいる。すなわち、小羊の犠牲はイエスの死を予期し、旧約聖書のマナは本当のいのちのパンに取って代わり、出エジプトは予型として罪と滅びから私たちを救う永遠のいのちを説明しており、そして過越の祭りは聖餐によつて引き継がれている。以上の内容は、イエスと彼の贖いによる十字架を指し示している。

5 主導権を持つているのはイエスである。

6 イエスの意図はピリポを試すためにあった。

7 ピリポは統計を気にして、算数の計算をした。彼が挙げた金銭の単位は、ローマ貨幣のデナリであり、その価値は労働者一人の一日分の労賃に匹敵するものであった(参照マタイ20・2)。彼は一労働者の二百日分の給料があつても、群衆のおやつにする

パンも買えないと考えている。ピリポは最初から奇蹟など行われることはないとの確信を持ち、何の幻も持てない実務家のようなのである。

8〜9 アンデレは小さな子どもが持っている弁当を手放させることができる人ではあったが、わずかな食物がイエスによつて用いられるとは信じていない。その場の緊急性に狼狽するアンデレ。

10 イエスは不信仰な弟子を教育し、信仰者として成長させようとしておられる。彼は群衆の規模にもかかわらず、食事の準備のために人々を座らせ、ごく普通に事を進めている。

11 イエスは神に感謝をささげつつ祈っている。彼はパンを祝福したのではない。そしてイエスは座っている人々に、**パンも魚も** 彼らの望むだけ分け与えられた。気前の良い食事は、旧約のメシヤ預言を呼び起こす(参照イザヤ25・6〜8)。

12 **少しでもむだにならないように、パンくずのあまりを集めなさい** 残った食事を集めるのは、当時のユダヤ人の習慣であった。

13 その食べ残りの余ったパンきれを集めると、十二のかごいっぱいになった。

14 群衆の興味は食料(6・26)と政治的メシヤ(6・15)に集中しており、受肉した御子イエスの中に永遠のいのちを見ているのではない。

参考図書 テニイ、M.C.、『ヨハネによる福音書』(聖書図書刊行会)・Carson,D.A., The Gospel According To John (Eerdmans) Morris,L., The Gospel According To John (Eerdmans)。

聖書

タイトル

ヨハネ6・13-14
小さなさげもの

暗唱聖句

(花の日・子どもの日)

ここに、大麦のパン五つと、さ
かな二ひきとを持っている子供
がいます。ヨハネ6・9

目標

小さな子どもも大いに神様のお
役に立てることを知る。

導入

(光田)

今日は、花の日、子どもの日です。美しい花を持
って、病気の人のお見舞いや、慰問に出かける
教会もあるでしょう。私たちが病気のときに、お
見舞いに来てくださったたり、お祈りしてくださる
人がいるならうれしいですね。そして私たちも、
弱い人を慰めたり、励ますようになれるなら、ど
んなにすばらしいでしょう。

今日は、一人の男の子がイエス様にささげたお
弁当が、びっくりするほど大勢の人々の食事に変
えられた奇跡から、小さな子どもであっても、神
様のお役に立てることを学びましょう。

困った出来事

イエス様がガリラヤ湖の付近で説教をしておら
れると、大勢の人たちが集まって来ました。それ
は、イエス様が病人たちをおいやしになられ、そ
の奇跡の力を聞いたからです。そこで、イエス様
は山に登り、弟子たちと一緒に座って教え始めら
れました。過ぎ越しの祭りが近づいていた頃のこと
でした。

お昼の時間はあつという間に過ぎてしまいまし
た。集まっていた多くの人々の心は、イエス様の
お言葉で満たされていました。お腹はだんだん
減ってきていました。イエス様ご自身は、そこに
いる全員のお腹を一杯にすることは簡単なことだ
ったのですが、ピリポを試して尋ねられました。「ど
こからパンを買ってきてこの人々に、食べさせよ
うか」。ピリポは困った顔をして、「二百デナリの
パンがあつても、一人一人に配るならほんの少し
だけになって、全然足りないでしょう」と答えま
した。他のお弟子さんでも、どうしたらよいか分
からず、あきらめかかっていた。

祝福されたお弁当

ところが、その話をそばで聞いていた一人の男
の子が、ペテロの弟のアンデレの服を引っ張って、
言いました。「おじさん、これ少しだけど、僕お弁
当持っているよ。役に立つかなあ」。彼は、今朝お
母さんが持たせてくれた、自分一人分だけの小さ
なお弁当を見せました。そこには大麦のパンが五
つと魚が二匹入っていました。この男の子だつて
お腹は減っていたはずですが、でもイエス様のお役
に立てたらと考えて、勇気を出してお弁当を全部
差し出したのです。そこでアンデレは、「イエス様、
ここにいます子どもが、大麦五つのパンと、魚を二
匹持つて来ました。でも、こんなに大勢の人がい
るのですから、何の役にも立たないですね」と、
困ったような顔をしています。

ところが、イエス様は早速、「人々を座らせなさ
い」と命じられたのです。そこに集まった人たちは、
男の人だけでも五千人もいたのですから、女

の人や子どもを合わせたら、一万人以上だったはず
です。イエス様はパンを持って感謝の祈りをさ
さげ、人々に分け与えられました。そして魚も同
じようにされました。受け取った人たちは、遠慮
しないで自分の欲しい分だけをもらうことができ
ました。そして、皆が満腹したのです。

それからイエス様は弟子たちに、「少しも無駄に
ならないようにパンのあまりを集めなさい」と言
われました。そして集められたパンくずは、何と
12のかご一杯になって返ってきたのです。これを見
た人々は「本当にイエス様はこの世に来られる
べき預言者だ」と、口々に驚きの声を上げました。
ささげるものは小さくても、神様が祝福されると
何倍にもなるのです。私たちも、このお弁当を差
し出した少年のような愛と勇気を持ちたいですね。

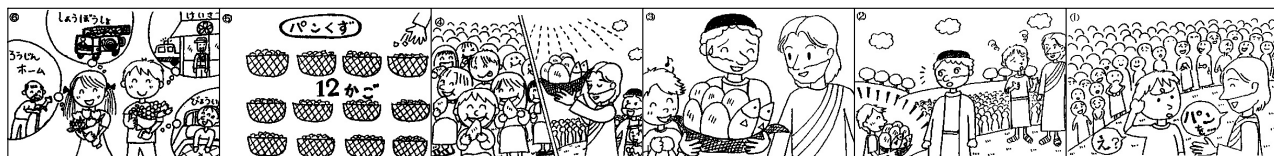
まとめ

これから、警察や病院、消防署などに花束を持
って感謝の気持ちを届ける人もいるでしょう。ま
た、老人ホームや病気の方を慰問する人もあると
思います。神様は、寂しい人、悲しんでいる人、
助けを必要としている人を、励め励ますために、も
私たちを用いてくださいます。花束を持って誰か
を訪ねませんか。神様はあなたを用いて、イエ
ス様の愛と優しさを届けてくださいます。

イエス様のことを知らないで、悲しんでいる人
に福音を届けるため、神様と人のお役に立てるよ
うに、私を用いてくださいますとお祈りしましょう。
私たちの助けを必要としている人が、どこかにい
るかもしれません。

♪5つのパン♪

(友よ歌おう77)



聖書 ヨブ1・1～22

テーマ ヨブの信仰

序論

(加藤)

エゼキエル書を見ると、義人としてノア、ダニエルと並んでヨブの名が挙げられている(エゼキエル14・14、20)。当時の人々は義人ヨブを良く知っていたのである。私たちもヨブの信仰について学びたい。

一、主の前に正しく歩むヨブ

ヨブ記はヨブの紹介をもって始まる。ウズの地に住むヨブは、**「そのひととなりは全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかった」**。(全く)は新改訳では**「潔白で」**、新共同訳では**「無垢な」**と訳される。ヨブは敬虔な信仰の持ち主であった。

ヨブには**「男の子七人と女の子三人があり」**、多くの資産を持ち**「東の人々のうちで最も大いなる者」**(新改訳、新共同訳では**「富豪」**)であった。このヨブが主の前に正しく歩む者であることの一つのエピソードが挙げられている。十人の子どもたちが集まって飲み食いしていたのだが、ヨブは宴会の中で子どもが罪を犯し神を呪うことがあり得ることを心にとめ、宴会の後彼らのために燔祭を献げた。ここにもヨブの神の前に敬虔に歩む信仰の姿勢がよく現れている。

二、試みられるヨブ

しかし、この全きヨブが思わぬ試みを受けることになるのである。ことの始まりは天上でのやり

取りであった。そこには主なる神の前に**「神の子たち」**(新共同訳では**「神の使いたち」**)と**「サタン」**が集まった。主はヨブの信仰を認め**「わたしのしもべヨブ」**とさえ呼んでおられる、サタンにヨブの敬虔たることを語ったが、サタンはこれに反論する。

サタンの反論はヨブが理由なく神を恐れたのではなく、神の物質的祝福を求めた功利的なものであるということであった。その証明のためにサタンは、神にヨブのすべての所有物を撃つてヨブを試みることを提案する(1・9～11)。主なる神はサタンの言うこと聞き入れ、ヨブの所有物をすべてサタンにまかせた。

天上でのやり取りは人間の預かり知らないことである。私たちはこの世の見えることしか分らないからである。しかしヨブ記は、神にとって退くことのできない天上での戦いがあることを示唆する。そしてそれは地上の人間に試みやチャレンジを投げかけるのである。

サタンの働きによつてヨブは恐ろしい試みを受ける。ヨブにとつて悪夢のような事件が次々と使者によつて告げられる。シバ人やカルデヤ人の略奪、天から下つて来た神の火によつて家畜や多くの僕が失われる。そしてとうとう大風によつて一瞬にして十人の子どもを失うのである(13～19)。

三、失意の中で主を讃えるヨブ

このようにヨブは突然すべてを失ってしまう。失意の中でヨブが取った行動はなんであつただろうか？それは礼拝であつた。

この時ヨブは**「起き上がり、上着を裂き、頭をそり、地に伏して拝し、そして言った、『わたしは裸で母の胎を出た。また裸でかしこに帰ろう。』**

主が与え、主が取られたのだ。
主のみ名はほむべきかな」。

ヨブは上着を裂き、頭をそるることによって悲しみを表わしつつも、地にひれ伏して主を**「礼拝」**(新改訳)し、ヨブ自身が本来神から与えられなければ何をもちない裸の身であり、ヨブに与えられた財産や愛する子どもたちも主にお返しするべきものであることを、謙遜に告白し、主のみ名を讃えたのである。

この告白と賛美に続いてヨブ記は**「すべてこの事においてヨブは罪を犯さず、また神に向かつて愚かなことを言わなかった」**ことを加えている。失意の中でヨブがこのような神に言い表わすことの出来た信仰の告白は、まさに旧約の金字塔である。ヨブ記はこの**「主のみ名はほむべきかな」**というヨブの告白を主題として展開する。サタンはヨブの信仰を失わせようとして必死に働き、ヨブ自身も自分の言い表した信仰のゆえに、さらなる試みを受け揺さぶられるのであるが、ヨブが言い表した信仰が、そのゆえにヨブ記の主題としての価値を失うことは決してないのである。

結論

私たちは失意の中で主を礼拝し御名を讃えたヨブの信仰に習いたい。容易なことではないが、主が私たちに信仰の力を与えてくださるのである。

研究資料

(木村)

ヨブは、自分自身だけでなく、子どもたちも神を恐れて生きるように絶えず心を配る父親であった。

テキスト

1 ウツ アラビヤ砂漠付近か。であればヨブは異邦人ということになる。単純な社会制度、主な財産は家畜、家長が祭司の役目を果たし、祭儀が制度化されていないこと等より、ヨブは族長時代の人物であったと思われる。全く 完全、の意(ターム)。新改訳「潔白」。ヨブには罪など全くなかったということではなく(9・20、13・26、14・16〜17)、神に対する態度が完全であったことを意味している。すなわち、ヨブは心に分裂がなく、ひたすら神を愛し、神に従おうとしていたということである。正しく 真つすぐ、の意(ヤーシャル)。「律法をことごとく守って行い、これを離れて右にも左にも曲」がらないことである(ヨシユア1・7)。神を恐れ、惡に遠ざかった 「見よ、主を恐れることは知恵である。惡を離れることは悟りである」(28・28)。神を恐れ、惡から遠ざかることは、知恵の真髄である。ヨブは、信仰的にも道徳的にも非の打ち所のない人物であった。

2〜3 神との完全な関係な関係にあったヨブには、多くの子どもと家畜に恵まれるという物質的にも完全な祝福(男七人と女三人、羊七千頭とらくだ三千頭、牛五百くびきと雌ろば五百頭、合わせる完全数の十の倍数になる)が伴った。

4〜5 めいめい自分の日 七人の息子がそれぞれ各曜日を受け持ち、毎日順番でふるまいを設けていたのであろう。聖別し 神のために特別に分け

離すこと(カードシユ)。新改訳「聖別することにした」。ふるまいが一巡した翌日、すなわち8日目の早朝には、いつも子どもたちを呼び寄せて聖別していた。いつも、このように行なった 新改訳「いつも(直訳は、すべての日々に)このようにしていた」。これらはヨブ家の良い習慣を表している。彼らすべての数にしたがって燔祭をささげた 新改訳「彼らひとりひとりのために、それぞれの全焼のいけにえをささげた」。ヨブは、十把一絡げではなく、子どもたち一人一人に細心の注意を払っていた。その心に神をのろつたかもしれない ヨブは、外面的な罪だけでなく、内面的な罪を恐れる人であった。子どもたちの生活の中に罪を見出したからではなく、罪を犯すかもしれないと思つたから、すなわち罪を未然に防ぐための聖別であった。イエスも心の罪を問題にしておられる(マタイ5・21〜22、27〜28、マルコ7・20〜23)。ヨブは、自らが神を恐れるだけでなく、子どもたちの霊的な面にも強い関心を払い、神の道からそれないように注意する父親であった。

6〜7 神の子たち 御使いたちのこと。サタン 敵対者、告訴する者、の意。「地を行きめぐり」、人の罪を探し出して主に訴える存在。御使いたちが列席する主の会議に、サタンもやって来て加わった。

8〜12 いたすらに 理由なく、益なく、の意(ヒンナム、本書の鍵語の一つ、2・3、9・17、22・6)。主はサタンに僕ヨブのことを誇るが、サタンは、ヨブは豊かな財産のゆえに神を恐れているのであつて、財産を失ってしまったば、さすがのヨブも神を呪うようになるはずだと反論する。ただ彼の身に手をつけてはならない サタンは神の許容

範囲を超えて働くことはできない。神がヨブの信仰をテストして、ヨブの信仰が本物であることをサタンに示すための試験であった。

13〜19 シバびとの襲来、神の火(雷か)、カルデヤびとの襲来、大風(竜巻か)が次々とほぼ同時に起こり、ヨブは一日の内に家畜や僕、さらには子どもたちまでも失ってしまった。

20〜22 起き上がり さすがのヨブも悲しみに打ちひしがれていたことを暗示しているが、ヨブは信仰によつて起き上がった。上着を裂き 深い悲しみを表す行為。頭をそり 哀悼の意を表す行為。地に伏して拝し 絶対服従を表す行為。裸で…出た…帰ろう 神の前には全く無力な存在、神あつての存在であることの認識。主が与え、主が取られたのだ すべての神から貸し与えられたもので、神からの要求があれば返却しなければならぬことを謙虚に認め(1テモテ6・7)、すべての出来事の中に神の御手を見、神を呪わず、むしろ神を賛美したヨブは、第一のテストに合格した。

ヨブ記の中心テーマは「義人の苦しみ」である。義人がなぜ試験にあつて苦しまなければならないのか。結局ヨブには苦難の理由は最後までわからなかったが、「わたしをあがなう者(ゴエール)」の存在に目が開かれ(19・25〜27)、さらには「わたしの目であなを拝見いたします」という体験(42・5〜6)によつて真の解決を得たのである。

参考図書 鷹取裕成「ヨブ記」『実用聖書注解』(いのちのことば社)・Andersen, F. I., «Job» Tyndale Old Testament Commentary, Vol. 13 (I V P) 他

聖書 ヨブ1・1〜222
タイトル ヨブの信仰（父の日）
暗唱聖句 主が与え、主が取られたのだ。主の
み名はほむべきかな。ヨブ1・21
目標 父親としてのヨブの輝く信仰に
学ぶ。

導入

（光田）

今日は父の日です。お父さんがいない人もいるかもしれませんがね。でも、皆さんが大人になったとき、聖書が教えている信仰をもったお父さんの姿を知っておくことは大切です。今日は、聖書の中でも、苦しみを背負った代表のような、ヨブの信仰から学びます。

神様を畏れる人

ウズの地に住んでいたヨブは、神様を畏れ敬い、悪事から遠ざかっている、正しい人でした。ヨブは、奥さんと、男の子7人と女の子3人の家族でした。子どもたちは仲がよくて、順番を決めてお互いに食事をもてなす習慣も持っていました。そして、羊が七千頭、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろば五百頭を持っていました。それに、僕がとても大勢いたので、この地方の人たちによく知られた金持ちでした。その上、皆に尊敬されていました。ヨブは父として、自分の子どもたちが、知らないうちに神様に対して罪を犯してはいけな思考え、子どもたちを呼び集めては、家族の人数に合わせて、神様に犠牲をささげていました。どこから見ても、神様に喜ばれ

る父親です。

神様の信頼

ある日、神様の前に神の子たちが集まりました。その中にサタンもいました。神様がお前はどこから来たのかとお尋ねになると、サタンは地のあちこちを見て回って来ましたと答えます。そこで神様は、「どこを捜してもわたしの僕ヨブのように、神様を畏れ、正しい者はどこにもいないであろう」と、自慢をなさいました。ところがサタンは「それは当たり前です。神様がヨブを特別に祝福されているから、ヨブは信仰をもっているのです。試しに、家や財産や家族を彼から奪ってみてください。そうすれば普通の人のように、神様を恨むことでしょう」。サタンがこう訴えたことに対して神様が言われました。「ヨブの身体を守るなら、彼の持ち物をお前に任せることにする」。これを聞いたサタンは、早速出かけました。ヨブはどうなるのでしょうか。

ある日、第一の息子の家に兄弟全員が集まっていた。つものように食事をしているとき、使いがやってきて、「シバ人が襲ってきて、牛もろばも奪われました。そして、あなたの僕たちも皆剣で殺されてしまいました。残ったのは私だけです」と報告しました。これを聞き終わらないうちにまた一人の人が来て、「神の火が天から下ってきて、羊と僕たちを焼き滅ぼしてしまいました。そこから逃れたのは私だけです」。まだ彼の話を聞いているときに、もう一人の人がこう言いました。「カルデヤ人が3組に分かれて来て、らくだを襲って奪い、僕たちを撃ち殺してしまいました。私はただ一人逃れることができました」。

この知らせがされているとき、また一人の人が来て言いました。「あなたの息子さんと娘さんが、第一の息子さんのところで食事をなさっているとき、突然大風が吹いてきて家を襲って、あの若い人たちの上につぶれ落ちました。皆さんが亡くなられました」。なんとという悲しみの出来事が一日のうちに起こったのでしよう。愛する子どもたちも、僕も、家畜も、すべてがあつという間に失われてしまったのです。

ヨブの信仰

この悲しみの知らせを聞いたヨブは、頭をハンマーで打たれたようなショックだったに違いありません。泣き叫んだでしょうか。腰が抜けて、ポーンとしたでしょうか。ヨブは起き上がり、上着を引き裂き、髪の毛をそり、地にひれ伏して神様を礼拝しました。そしてこう言いました「わたしは裸で母の胎を出た。また裸でかしこに帰ろう。主が与え、主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな」。お母さんのお腹から生れたときは裸でした。私の持っていたものは全部神様から与えられたものです。今無くなった全てのものは、神様がもう一度取られただけですと言いました。神様をうらむ言葉は、一つも出てきませんでした。

まとめ

ヨブは、自分のためだけでなく、家族全員が神様に喜ばれるようにしていた父親です。そして、悪いことが起こっても、文句を言いませんでした。神様がいつも最善をしてくださると信じ切ったヨブは、信仰の父の手本です。

（ブレイズワールド25）



聖書 使徒6・1～15 テーマ ステパノ

序論

(加藤)

ステパノは使徒行伝中の最初の殉教者として登場する。しかしステパノの殉教は福音宣教の大切な礎となった。ステパノの殉教を契機に散らされた人々は、主イエスのお言葉(使徒1・8)の通りエルサレムからユダヤとサマリヤ(8・1)さらには、アンテオケ等(11・19)に散らされてキリストの証人となった。また異邦人伝道に用いられたパウロもステパノの殉教を見て(22・10)、その後、劇的に回心したのであった。このように迫害の中で大胆にキリストを証し、宣教の道を開いたステパノに学びたい。

一、信仰と聖霊に満ちた人ステパノ

当時のエルサレムの教会には、ヘブル語を使うユダヤ人とギリシャ語を使うユダヤ人が集まっていた。ところが人数が増すにつれて、ギリシャ語を使うユダヤ人のやもめに対する食料の配給の問題が生じてしまった。この問題を解決するために十二使徒は、教会の中から「御霊と知恵に満ちた、評判のよい人たち七人」を選び出し、配給の仕事をまかせることにした。この提案によって選ばれた七人の筆頭が「信仰と聖霊に満ちた人ステパノ」である。

配給の問題はアナニヤとサツピラの事件(5・1～11)以来の、教会の内なる一致を失わせる深刻な問

題であった。この問題の取り組みいかんで教会はさらに祝福されるか、それとも力を失うかの境目にあったかも知れない。そのような中、ステパノは人一倍、知恵と配慮を要する大切な務めを7人の筆頭として託され、見事に全うしたのである。そしてこれによつて使徒たちは、祈りとみ言葉の御用に存分に専念することができるようになり、「神の言は、ますますひろまり」教会はさらに成長したのである。

二、恵みと力に満ちたステパノ

ステパノは教会内での奉仕だけに携わっていたわけではなかった。ステパノは「恵みと力に満ちて、民衆の中で、めざましい奇跡としるしを行っていた」。そしてこのステパノの力に満ちたわざは、エルサレムの人々に関心を引き起こしたようである。当時「リベルテン」の会堂に属する人々すなわち各地から来てエルサレムに定住し、ユダヤ人の伝統に熱心であったと思われる人々が立ち上がつてステパノに議論を挑んだ。しかしステパノは「知恵と御霊とで語っていたので」、誰もステパノに対抗することは出来なかった。

このステパノの力あるわざと大胆な話しぶりは使徒行伝で先に登場したベテロやヨハネ(使徒2・4章参照)とも共通している。それは人間の力によるものではなく、聖霊によるものであった。ステパノは自らを聖霊に明け渡した、用いられやすい信仰の器であった。

三、天使の顔のように輝いたステパノ

しかしステパノの大胆な宣教は、彼らの激しい

怒りを招くことになった。その結果ステパノは捕えられ、議会に引き出され、偽りの証人によつて聖所と律法を汚す言葉を吐いたとの咎で告発された。この時、議会の人たちはステパノに目を注いだ(彼の顔は、ちょうど天使の顔のように見えた)のである。

ステパノの殉教において注目すべきことは、ステパノの死が、キリストの死と重ね合わされるように描かれていることである。迫害の中ステパノはキリストの預言のとおり、人の子が全能の神の右に座するのを証言し(ルカ22・69、使徒7・56)、キリストと同じように自分を処刑する者たちの赦しを祈り(ルカ23・34、使徒7・60)、キリストと同じように自らの霊を主のみ手にゆだねたのである(ルカ23・46、使徒7・59)(R・E・ブラウン『新約緒論』296頁「英文」参照)。ステパノは苦難に身を投じる中で、十字架のキリストの似姿に近づくことができたのである。

そのステパノの顔が「天使の顔のように見えた」のは、ステパノが聖霊によつてキリストの御品性にあずかり、変貌の恵みをいただいたからに他ならない(ルカ9・29)。信仰と聖霊に満ちたステパノは、迫害の中で自らの身をもってキリストご自身を証したのである。

結論

迫害の中ステパノは、キリストのように輝いて自らの使命をまっとうした。私たちも御霊の助けをいただいてキリストの証人として生きよう。

研究資料

(木村)

弟子の数が増えるにつれて問題も生じてきた。その問題を解決するために選ばれた7人の奉仕者の筆頭ステパノは、初代教会最初の殉教者となった。
テキスト

1 **ギリシャ語を使うユダヤ人**(ヘレニステース) パレスチナ以外で生まれ育った、いわゆる離散(ディアスポラ)のユダヤ人で、ヘレニストと呼ばれる。ギリシャ語を使った。**ヘブル語を使うユダヤ人**(ヘブライオス) 大半がパレスチナで生まれ育ったユダヤ人で、ヘブライストと呼ばれる。「ヘブル語」とあるが、正確にはアラム語を使った。**日々の配給**(ディアコニア) 裕福な教会員たちが「資産や持ち物を売って」献^{ささ}げた献金によって、貧しい教会員たちのために日々の配給が行われていた(？:44〜45)。
苦情 これは、ブーブーという音を表す擬音語(ゴングスモス)。両者は同じユダヤ人であっても、言葉も生活習慣も異なることもあって、両者の間には以前から緊張状態があった。それが遂に表面化する契機となったのが、ヘレニストの「やもめらが、日々の配給で、おろそかにされがち」という一見些細な問題であった。ヘブライストによって日々の配給が行われていたからであろう。

2〜6 **食卓のことに携わるのはおもしろくない**(ディアコネオ) 十二使徒の第一の使命は「祈と御言のご用(ディアコニア)に当ること」、すなわち礼拝とみ言葉の宣教であり、日々の配給は彼らの第一の使命ではなかった。配給を軽視したわけでは決してない。**御霊と知恵とに満ちた、評判のよい人**だ

ち七人 奉仕に携わる者は、まず御霊に満たされた人でなければならない。次に、人間的な知恵ではなく、神の知恵によって問題解決にあたることのできる人でなければならない。そして、信仰的にも人格的にも、教会の内外で証しの立っている人でなければならない。**選^えび出して** 7人はいずれもギリシャ名を持つ人で、ヘレニストと思われる。ヘレニストから出た苦情を処理するためには実に賢明な人選であった。7人のうち筆頭に記されるのがステパノ(冠、の意)であり、特別に「信仰と聖霊とに満ちた人」と紹介されている。二番目に記されるピリポも目覚しい働きをした(8:5〜40、21:8)。**手を彼らの上においた** 旧約時代、祝福を与えるために按手した(創世記48:13〜16)。牛や羊を供え物として献げる際、牛や羊の頭に手を置いたが、それによって供え物と手を置いた人とは一体となることを意味した(レビ1:4、3:2、4:4、16:21他)。さらに後継者を任命するために按手した(民数記27:22〜23)。それゆえ、十二使徒による按手は、十二使徒と7人を結びつけ、7人を祝福して奉仕に任命するためのものであった。

7 **こうして神の言は** 7人が実際の奉仕をし、十二使徒が「もっぱら祈と御言のご用に当ること」になった結果、「こうして神の言は、ますますひろまり…ふえていき…受けいれるようになった」。いずれも未完了時制で、継続的な成長を描写している。同様の宣教の伸展報告が、9:31、12:24、16:5、19:20、28:31にも出てくる。

8 **奇跡としるし** 7人は、配給をはじめとする実際の奉仕をこなしただけでなく、福音宣教において

も目覚しい働きをした。その筆頭がステパノである。**行^なっていた** 未完了時制で、ステパノが奇跡としるしを再三再四行っていたことを表している。

9 **リベルテン** 奴隷の身分から解放された人々やその子孫のこと。**会堂** ユダヤ人が神殿に代わるものとして建てた礼拝と教育の場。

12 **扇動し** 民衆が弟子たちに敵対する最初の記録である。

14 **『あのナザレ人イエスは…』** イエスが「この神殿をこわしたら、わたしは三日のうちに、それを起す」と言われたのは(ヨハネ2:19)、「自分のからだである神殿のことを言われた」のに、偽証者たちはそれを曲解して訴えた(マタイ26:61)。ステパノも同様に曲解され、訴えられた。

15 **天使の顔のように見えた** 「主と語ったゆえに、顔の皮が光を放って」いたモーセや(出エジプト34:30)、変貌山で「その顔は日のように輝いた」イエスのように(マタイ17:2)、神と交わり、神の臨在を示す顔つきであった。次章よりステパノの弁明が始まり、反対者たちの憎悪を買い、殉教の死を遂げるのであるが、この時のステパノの顔は、迫害者サウロの脳裏にいつまでも焼きついて離れなかったことであろう(7:58)。

参考図書 斎藤篤美「使徒の働き」新聖書注解 新約2『(いのちのことば社)、F.F.ブルース「使徒の働き」(聖書図書刊行会)」、

Longenecker, R.N., "The Acts of the Apostles", "The Expositor's Bible Commentary, Vol.8 (Zondervan) 他

聖書 使徒6・1～15
 タイトル ステパノ
 暗唱聖句 彼の顔は、ちょうど天使の顔のように見えた。 使徒6・15
 目 標 迫害の中で立派な証人となったステパノの姿にならう。

導入

(光田)

皆さんには尊敬する人がいますか。スポーツ選手、将棋の名人、両親など。自分が「立派だな、すばらしいなあ」と思う人のようになりたくて願いますね。今日は、信仰のために苦しみに合いながらも、天使のような顔の輝きをして、イエス様の証人となったステパノのお話です。

7人の選び

初代教会で選挙が行われました。生れて間もないころの教会は、皆が持ち物を分け合い、助け合って生活をしていました。大勢の人たちがいたので、ヘブル語を話すユダヤ人もあれば、ギリシャ語を話すユダヤ人もいました。そのうちに毎日配られる食料のことで、私たちは少ししか食べ物が分けてもえない、不公平だと、不満を言う人たちが現れてきました。

その頃、使徒と呼ばれたイエス様の弟子たちは、伝道のために毎日忙しく働いていたので、皆の食事の世話をしたり、気を配ったりする時間が少なくなっていました。そこで、誰か他の人にこの問題を担当してもらおうということになりました。そこで、どのような人をこの御用に選んだら良い

か、条件を考えました。皆さんなら、給食の苦情処理係にどんな人がいいと思いますか。使徒たちは教会の働きを助ける人は、「御霊と知恵とに満たされた、評判の良い人」がよいと考えました。

このことを聞いた人たちは、皆賛成しました。そして選ばれたのが、ステパノ、ピリポ、プロコロ、ニカノル、テモン、パルメナ、ニコラオでした。中でもステパノは、信仰と聖霊とに満ちた人として、評判の人物でした。使徒たちは彼らを前に立たせ、手を置いてお祈りをしました。

恵みと力に満ちた人

神様のみ言葉はますます広まり、エルサレムでもイエス様を信じる人々がどんどん増えて、ユダヤ教の祭司までもが信じるようになっていたのです。そして、ステパノは忙しい毎日が続きましたが、恵みと力とに満たされて、民衆の中で驚くような奇跡としるしを行っていました。

すると、ある人たちがステパノに議論を吹きかけてきました。ステパノが知恵と御霊によって語ったため、彼らはどうしてもステパノに勝てませんでした。すると、この人々は悪い評判を流して、ステパノに仕返しをしようと企みました。そこで彼らは、人々をそそのかして、「ステパノはモーセと神の言葉を汚すのを聞いた」と言いふらすように仕向けたのです。その上、民衆、長老、律法学者までも味方につけて、ステパノを襲って捕らえ、議会に引き渡しました。そこでも偽りの証人を立てて、「この人は、聖所と律法とに逆らう言葉を吐いています。しかも『ナザレ人イエスは聖所を打ち壊して、モーセの律法を変えてしまう』

と言っているのを聞きました」と言わせました。ステパノは全くのぬれ衣を着せられたのです。

天使のような顔

訴えた人たちは、頭に血を上らせ、つばを飛ばしながら激しい口調で、ステパノが悪人であると訴えていたのです。大声と憎しみが、その議会に渦巻いていました。

ところが、自分に対する偽りの証言が聞こえているはずのステパノは、議会に集まる人たちとはおおよそ違う様子です。彼の周りには、平和が満ち、ステパノの顔はまるで天使のように輝いて見えました。どんなに非難され、うそが語られても、自分の潔白を証明しようと、腹を立ててののしったりすることは全くありません。きつとステパノはイエス様の御声を聞き、イエス様の御顔を見ていたのでしょう。議会の人々に対する恨みや憎しみとは関係がなく、輝きを放っていたのです。

まとめ

ステパノたちが選ばれた条件は、御霊と知恵とに満ちた評判の良い人ということでした。彼は、イエス様の御霊に満たされていたのです。ののしられても、ののしり返さず、一切のことを神にゆだねておられたイエス様と同じ心を持って、この会議の中に立つていました。ステパノは、自分を守るためにはなく、イエス様が生きておられることを証明するために、神様が立てられた、すばらしい証人でした。私たちも悪口を言われたりしたときは、ステパノのことを思い出し、祈って主を見上げましょう。

♪ 僕の心の中が ♪

(プレイスワールド4)



カリキュラム解説

(編集部)

はじめに

二〇〇四年度から二〇〇六年度の三年カリキュラムを終えて、二〇〇七年度から二〇〇九年度の新しい三年カリキュラムに入っていきます。

年題としては、二〇〇七年度が「信仰に生きる」(ハバクク2・4)、二〇〇八年度が「愛に生きる」(ヨハネ15・9)、二〇〇九年度が「希望に生きる」(ローマ5・2)となります。

夏期教案は、二〇〇七年度が「信仰の父アブラハム」、二〇〇八年度が「愛の使徒ヨハネ」、二〇〇九年度が「炎の人パウロ」となっています。

今年度からのカリキュラムの特徴は、今まで年間三期でしたが、「牧羊者」の発行と一致させるために、年間四期にしたことです。第一期(4月～6月)「十字架信仰」、第二期(7月～9月)「働く信仰」、第三期(10月～12月)「族長たちの信仰」、第四期(1月～3月)「キリストの信仰」という期題となっています。

月ごとの解説

4月・福音に生きる

バーム・サンデーから始まる新学期は、福音の二本柱、十字架と復活の福音です。過去の出来事であると共に、今も生き生きと福音に生きることが出来る恵みを語り込みたいのです。

5月・聖霊に満たされて

キリストの昇天と、三大祭の一つ、ペンテコス

テを祝う月です。クリスマス、イースターと共に驚くべきペンテコステの祝福を、教師自身が聖霊に満たされてできますように！

6月・証人として生きる

月の半分は教会行事となりますが、キリストの証人として生かされる魅力を伝え、自分たちもそのように生きたいとの渇きが与えられるなら何と幸いでしょうか。

7月・天地創造

「信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉で造られたのであり、したがって、見えるものは現れているものから出てきたのでないことを悟るのである」(ヘブル11・3)。この信仰に堅く立つことができますように。

8月・救いの箱舟

ノアの箱舟の史実を通し、驚異的とも言えるノアの生き生きと働いた信仰によりチャレンジを受け、偉大な信仰者を目指します。今や、十字架こそがこの時代の救いの箱舟であることを信じます。

9月・新創造

「命」の価値が低下しているこの時代、神よりの命を尊び、真に永遠の命を受け取り、生かされるように、確実に一人一人を導きます。

10月・受け継がれる信仰

族長たちに受け継がれてきた祝福の基としての信仰に学び、私たちも、この尊い信仰の遺産を子どもたちに残し、継がせるものとされましよう。

11月・勝利の信仰

ヤコブ、ヨセフの信仰の生涯の内に勝利の信仰を見、それにならう者とされます。

12月・クリスマス

毎年、期待をもって迎えるアドベントとクリスマス。今年は「信仰」に焦点を当てて、救い主の降誕をめぐる人々に学びます。

1月・はじめの伝道

第四期は「信仰の導き手であり、またその完成者であるイエス」(ヘブル12・2)の信仰、その始めの伝道から学び、信仰の原点にもどります。

2月・ガラヤ伝道

弟子たちの信仰を励ました奇跡、召命、説教を学ぶことによって、健全強固な信仰を養います。

3月・ユダヤ伝道

キリストの信仰のクライマックスとも言える、ユダヤ伝道。今年度は二度、バーム・サンデーと、イースターが入ります。純粋な福音への純粋な信仰を大胆に勧めましよう。

おわりに

今年度も、教会暦を大切にして組みましたが、教会行事については、カリキュラムの流れの方を重視したものもあります。たとえば敬老の日(九月)と、子ども祝福のように。カリキュラムや教案などは、骨子を参考にいただき、それぞれの現場に応じて、祈りと信仰を働かせてください。奉仕者が恵まれ、養われ、成長し、用いられ、幼い魂がキリストのみもとにとらえられていくこの一年でありますようにと祈りつつ、お届けいたします。なお、カリキュラムに沿って組まれている日々の「子ども聖書日課」を、CS教師の皆さんが一週早く読むことは、予習になり幸いです。この一年も奉仕者が祝され、用いられ、救いのみわががなされますようにとお祈りいたします。

牧羊ひろば

主にむかって両手をあげよ。

岡南教会CS

を強く感じたことから等々、それぞれ神様からいただくチャレンジとして、それぞれの奉仕者のタラントと地域性を生かした働きがなされていきます。平日の夕方や土曜日の午後などを中心に開催されています。やって来る子どもたちの時間帯がまちまちで、子どもがやって来る度に何度も何度もシ



津島ハレルヤ分校

岡南教会の教会学校の働きを紹介します。

分校の働き

現在岡山市内に五つの分校があります（上中野・宿・津島（2カ所）・迫川）。

開校の経緯はそれぞれで、伝道所としての働きから、我が子の友だちの集まりから、閉校する分校を引き継いだことから、地域への福音の必要

行事

日曜日の朝、8時45分。本校CS教師の準備祈禱会から始まります。9時から幼稚園、小学校、中高校の礼拝が始まります。幼稚園は、最初の賛美だけ一緒にいます。その後、別室で幼稚園礼拝を行います。礼拝後、それぞれの科に別れて分級をします。信徒の子どもが中心で、ほとんどの子どもは親と一緒に来ます。子どもだけでなく保護者の気持ちも礼拝に向けての祈りの課題です。



花の日の老人ホーム訪問



幼稚園楽しく分校中

ヨートメッセージを語り、子どもたちのために祈り続けているCS教師の姿があります。今の子どもや家庭の諸問題がそのまま持ち込まれる事も多くあり、祈りを要すると共に、CS伝道最前線の働きであると言っても過言ではありません。

本校の働き

① 花の日

子どもたちが描いたみ言葉を添えた花の絵と、ヤクルトのカップに小さな花を生けたカップフラワーを携えて、教会員がおられる老人ホームを慰問します。ピアノ、ギター、タンバリンに金井先生のサクスを加えた歌を披露し喜ばれました。

② 夏期学校

毎年二泊三日、本校・分校合同で行います。二日目からは、ファミリーキャンプとなり、保護者と共に幼稚園から小学校2年生までも参加します。親族が集まって一緒に過ごす、夏の一大イベントになっている家庭もあります。フィールドアスレチック、おもしろ自転車、体育館レク、うどん作り、飯ごう炊き、川遊び等、毎年メニューを変えながら行われるプログラムと、早天祈禱会、3回の礼拝と分級、キャンプファイヤーで友だちや神様とも打ち解け、最終日の作文発表会での子どもの証と、初日と明らかにちがう喜びに満ちた賛美の声を聞くと、二泊三日の疲れも心地よくなります。



夏期学校

③ 野外礼拝

車で15分ほどの所にあるグラウンドを借りて、本校・分校合同で土曜日に行います。自然の中で礼拝をした後、ミニ運動会を行います。綱引き、玉入れ、リレーなどの定番に加えて毎年趣向を凝らした競技で、子どもだけでなく大人（保護者・CS教師）もついつい真剣になりいい汗をかきます。

④ クリスマス

第一部のクリスマスメッセージ、ミニコンサート・聖誕劇・トーンチャイムの演奏など毎年企画を変えて行う第二部の後には、持ち寄り形式のポトラックパーティーを開きます。毎年教会員の方からも多数差し入れがあり、さながらケーキバイキングのようなときもありました。

そのほか、岡南教



修了祝会ケーキバイキング



トーンチャイムでクリスマスソング



ミニ運動会

会自慢の庭に隠された卵を捜すイースター、教会員の方の畑におじゃましての芋掘り、お餅つきやビンゴ大会で盛り上がる子ども大会、年4回のお楽しみタイムを盛り込んだ礼拝を行うスペシャルデー等を行っています。

CS教師会

第3日曜日の礼拝後に、全CS教師で教師会の時をもちます。金井先生からのシヨートメッセージの後、本校各科・分校の現状と祈祷課題を報告し祈り、行事等の計画を話し合います。一月の新年教師会では、岡山名物鮎飯（あなめし）を食べながら、プレゼント交換を行い、主にある楽しい交わりの時となっています。

「夜、初更に起きて叫べ。主の前にあなたの心を水のように注ぎ出せ。町のかどで、飢えて息も絶えようとする幼な子の命のために、主にむかって両手をあげよ」（哀歌 2章19節）。

子どもをとりまく現状は様々です。ハッキリしていることは、世の荒波の中で、子どもたちに本当の喜び、本当の愛が必要なこと。この事のために、祈りの手を降ろすことなく、主に仕えていきたいと願っています。

（家森康彰）



スペシャルデー後の記念写真

芋掘り

「おわりに」

『牧羊者』二〇〇七年度第一巻をお届けできますことを感謝します。執筆の方々には、教会総会など大変あわただしい中を執筆していただき、心から感謝いたします。

教師養成講座「旧約聖書早わかり」を、鎌野直人先生が執筆してくださいました。今回のカリキュラムのヨブ記が分かりやすく執筆されています。どうぞご覧ください。また、今号からの新カリキュラムの解説をご覧ください。『牧羊ひろば』も情報交換に役立っているとお聞きし感謝いたします。今回は岡南教会です。

今後も『牧羊者』が大いに用いられるように、引き続きお祈りくださいますよう、宜しくお願いいたします。終わりに今号の執筆者を紹介いたします。

聖書講解 鎌野 善三 加藤 郁生
研究資料 足立 宏 木村 勝志
メッセージ例 松浦 みち子 光田 隆代
ワーク 木村 純子 鎌野 幸
長谷川 ひさ子 長尾 秀紀

中 高 科 加藤 清 上森 恭子 杉山 俊一
フランチカード 小岩 裕一
子ども聖書日課 土屋 直子 藤井 洋美
小野 淳子

また、校正をしてくださった鎌野善三師、小岩裕一師、光田隆代師、打ち込みをくださった小岩喜代美師、藤井正子師、楠淳子師、み言葉カードの陰山恭子師、陰で労された兄弟姉妹の方々、また、発送とワーク印刷をされたベラカ出版の方々、印刷会社の菱三印刷とアクトに心から感謝いたします。（長谷川和雄）

聖書教育教案誌 牧羊者

二〇〇七年度 一巻

二〇〇七年三月十日発行

発行所 有限会社 ベラカ出版
企画監修 日本イエス・キリスト教団教会学校局
神戸市兵庫区塚本通三―三―一九
電話（〇七八）五七五―五五一一
FAX（〇七八）五七五―一六六一
印刷所 菱三印刷株式会社
電話（〇七八）五七六―三九六一
*日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み